
サイレントジェラシー

yukino

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイレントジェラシー

【Nコード】

N3714Q

【作者名】

yukino

【あらすじ】

「刑事の恋」……それは許される「恋」ではなかった。

「刑事の妻の恋」……自分は彼に相応しいとは思っていなかった。
た。

「恋をした妻の刑事の夫」……「嫉妬」なのか？「諦め」なのか？
分からなかった。

絡み合うそれぞれの思い。もつれた糸は解くことが出来るのか……

第一話

「来ちゃった……」

女が言った。

「いいんだよ。俺が呼んだんだから」

男が言った。

「私なんかでいいの？」

また、女が言った。

「『私』じゃなくてはダメなんだよ」

男が答えた。

1

(1)

「行ってきます」

川島達也は無人の部屋に向かってひとり言を言い、マンションの自室を出た。

いつもの様にマンション北西にある小さな公園を見下ろした。ブランコの脇にある花壇に植えてある色とりどりのパンジーが、冬の朝日を浴びて「おはよう」と川島に声をかけている様だっ

た。

「おはよう……」

思わず笑みがこぼれた。

師走に入った最初の月曜日……今日は朝から気分が良い……

マンションの階段を降り、郵便受けから新聞を抜き取った時
冷たい風が頬を撫でた。

川島はコートの襟を立てJR新横浜駅篠原口方面に向かった。

川島達也は、神奈川県警神奈川中央署刑事第一課強行犯係に
勤務する巡査長である。

「おはようございます」

駅に向かう途中、小さな花屋の前で、店のオーナーだろうか、
ポツチャリとして笑顔が可愛い

年配の女性が花に水をあげながら朝の挨拶をしてきた。

「おはようございます」

川島も笑顔を返した。

そのまま花屋を通り過ぎ様としたが、シャッターを開けたばかり
の花屋の店内にある可愛いピン

クの花が目につき足を止めた。季節は冬に入ったばかりだが、
店内は春の様相だった。

「あの……すみません。こんなに早い時間に申し訳ないのです
が、花を売ってもらえますか？」

「えっ、あー、いいですよ。どちらにしますか？」

少し驚いた様子で、花屋のオーナーが答えた。

「うーん……これがいいかな……」

川島は店内を一通り見回し品定めをした後、濃いピンクの花が可愛い鉢植えを指さした。

「贈り物ですか？」

「いや、違います。そのまま袋に入れてください」

……イイ年の男が職場に花を飾る……などとは思ってもいないのだろう……

「あの……この花、なんて言う名前ですか？」

「これはプリムラジュリアンですよ。可愛いでしょう。性格も可愛いんですよ。こんなに寒い冬

でも花を咲かせてくれて。とっても丈夫な花」

「プリムラジュリアン……女の名前みたいだな……」

川島のひとり言の様な呟きを聞いたオーナーが笑った。

「390円になります。レジが開いていないので、レシートは出ませんがよろしいですか？」

オーナーはそう言って、一番良さそうなジュリアンの鉢植えをビニール袋に入れて川島に渡した。

「構いません。無理言ってすみません」

「大丈夫ですよ。ありがとうございます」

川島はズボンのポケットから小銭を取り出して、鉢植えを取りながら代金を支払い、オーナ

ーの笑顔に見送られて花屋を後にした。

濃いピンクのジュリアンの鉢植えは刑事一課強行犯係の男所帯の雑然とした部屋には相応しくない。

「でも、そんな部屋に可愛い色をつけるのもいいか……」

何故か、今朝はそんな気分になった。

J R東神奈川駅に程近い場所にある神奈川中央署に向かう道すがら、手に提げているジュリアンの鉢植えがくすぐったい様な気持ちになった。部屋だけではなく、自分にも相応しくない。署の仲間にも何だかんだとからかわれるだろう……

まだ8時前だったが、署はもう活動を開始していた。

ジュリアンの鉢植えを持った姿を署員に見られるのが恥ずかしかった川島は階段を二段飛ばしで

駆け上り、刑事第一課の部屋に急いだ。

「ようっ！」

刑事第一課がある二階の喫煙スペースの前を通った時、誰かに声をかけられた。

声をかけたのは刑事第二課組織犯罪対策係の岡村佳伸巡査部長だった。

「おはようございます」

川島は頭を下げた。

「最近、お前んとこ調子良さそうじゃない。検挙率も挙がってさ」

喫煙スペースの扉を開け、煙草の煙を川島に向かって吐き出しながら岡村が言った。

川島と同じ年だが、階級は岡村が一つ上になる。暴力団担当の組織犯罪対策係の中ではハンサムで、署内の女性職員に人気もあるが「自分が、自分が」という部分が強く、むき出しな所が川島は苦手だった。

「……」

岡村の言葉に答えず、川島は片手を上げてその場を立ち去ろうとした。

「大きなヤマがなく、余程のドジを踏まなけりゃ良い正月を迎えられるってか。だけど、一人ぼ

っちの正月は淋しいよなー。いつまでも独身のいい男ぶって選り好みをしてたってなんにもならないぜ。刑事の出世には社会的な信用も大事なんだよ……って。

そっかー、女にも出世には興味

はないってか。つまんねえ男」

ドアを開けたままの状態で、廊下に煙草の煙を撒き散らしながら、岡村は川島の背中に向かった。

てまた嫌味な言葉を投げつけた。

同じ年でも、同じ神奈川中央署勤務だからと言って、岡村と特にトラブルなどがあったわけでは

はないし、嫌味を言われる筋合いでもない。余程虫の居所でも

悪いのか……刑事第二課は三階に

ある。三階にも喫煙スペースがあるのに、わざわざ二階に降りてきて煙草を吸っている、という

のは係の誰かと揉めたのか……？

（何があったか知らないけれど、勝手に言えればいいさ。そういうお前の根性がお前の人生をつまららないものにする、という事を思い知れよ！）

川島は声には出さず悪態をつき、刑事第一課の部屋のドアノブに手をかけた。

ドアを開ける前に岡村の方を振り向くと、空になった煙草の箱を握り潰しながら、不機嫌そうに

階段を上がろうとしている岡村と目が合った。「気に食わない野郎だ」そう言いたげな岡村の視線を感じた川島は不快な気分になった。

一度手にかけたドアノブから手を離し、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着けて、川島はドアを開いた。

「おはようございます！」

顔を上げて真っ直ぐ前を見て元気良く挨拶をした川島の目に最初に飛び込んで来たのは、刑事

第一課強行犯係長、川島とコンビを組んでいる松岡健一警部補の姿だった。松岡は手にしたコー

ヒーカップのコーヒーを口に含んだ瞬間だった。

「おはよう！ 今日早いな」

コーヒーを一口味わった後、松岡は笑顔で川島を迎えた。

「アッ！ また、やられちゃいました」

松岡の温かい視線にホッとした川島は頭を掻いた。

「なんだよ。やられちゃったって……？」

人の良さそうな笑顔を向け、コーヒーをすすりながら松岡が訊いた。

「今日は、いつもより少し早く家を出たんですよ。だから、自分が一番乗りかな……そう思ったんですけどね……」

「甘いな」

松岡は、川島が手に持っている鉢植えが入ったビニール袋に目を留めながら答えた。

「松岡さんより早く署に着くには何時に家を出ればいいか……そんな事を考えながら、昨夜は寝たんですけどね」

「そんな事にお前の大事な労力を使うなよ」

松岡はそう言いながら、川島のためにコーヒーを用意した。コーヒーメーカーのポットから、川島のマグにコーヒーを注ぐ時、思わず笑みがこぼれたが、松

岡は川島には気付かれない様にその笑みを引っ込めた。

川島は神奈川中央署に赴任してから四年、松岡とコンビを組んで一年になる。それまではそれ

ぞれ別の相方がいたが、松岡に就いていた若い刑事が別の署に異動になった際、松岡から指名さ

れて川島はコンビを組む様になった。松岡は、大学も出ていないわゆるノンキャリアだ。テレ

ビドラマや小説のモデルになりそうな、捜査に時間を取られて、昇進試験も満足に受けていない

刑事だ。本人はそれで良しと思っているが「科学的な捜査」より「勘が頼り」の捜査方針に、川

島は納得出来ない部分があった。「勘」は大事だと思うし、ベテラン刑事である松岡を認めてい

ないわけではない。「これからそういう時代じゃない」何処かで松岡のやり方に納得していな

い部分が川島にはあった。それでも、筋金入りの刑事である松岡を尊敬していたし、一目置いて

いた。

まもなく40歳を迎える川島も、松岡の下に就いている様な年齢ではない。今は巡査長だが主

任クラスの巡査部長職に就き、部下を指導すべき立場になってもおかしくはないが、松岡とはま

た違った部分で、松岡以上に出世には欲を示さなかったし、どちらかと言うと上に立つよりは、

誰かの下に就く事で力を発揮するタイプだった。

「申し訳ないです……本当にスミマセン……」

松岡が自分のためにコーヒーを入れてくれた事に川島は恐縮をした。

「お前さ……いつまで経っても他人行儀な奴だよな。上司にコーヒーを入れさせた、って恐縮し

ているのってお前ぐらいだよ。もっと今時の若者みたいに偉そうにしていたっていいんだぞ」

「だって、自分は若者じゃないし……」

「まあな、来年はアラフォーか……だけど、俺からすれば若者に少し毛が生えた様なものだけだな。ところで、何だよ。その袋に入っているのは？」

「プリムラジュリアンって言うんです。駅に行く途中の花屋で見つけて、無理言って売ってもら

ったんです。殺風景な男所帯の職場に咲く花……って、いうところかな……」

終わりの言葉は少し声が小さくなった。

川島は袋から鉢植えを取り出し、コーヒーマーカーが置かれているキャビネットの上に飾った。

部屋の中がパツと華やいだ雰囲気になった。

「男所帯に咲く花……か……それが必要なのはお前じゃないか。みんなは花を持っているんだよ」

「はあ……？」

「まあ、俺の所はそろそろドライフラワーになりかかっているけどな」

「あー……そういう事……ですか……」

川島は肩をすくめて、上目遣いに松岡を見た。

「そういう事だ……」

（そろそろ身を固めろよ）川島を見る松岡の目がそう訴えていた。

「これ、見せてもらうよ」

松岡はコーヒーをすすりながら、川島のデスクの上の新聞を手を取った。

「どうぞ」

川島は椅子に腰を下ろし、コーヒーを口に含んだ。

「今年はこのまま何もなければいいけどな」
新聞を開きながら松岡が言った。

（何もなければいい……か……）

川島は声に出さず呟いた。

「ですよね……」

そう答えて、川島はデスクトップパソコンを開いた。

開いた瞬間、自分を憎憎しげに見つめる岡村の顔が浮かんできた……気分の良い朝が台無しになる表情だった……また、嫌な感覚に襲われた。

川島のパソコンが立ち上がった頃、強行犯係の係員が出勤してきた。

「あれっ！　こんな所に花があるよ」

「これは……」

訊かれる度に川島は説明しなくてはならない羽目になった。

そして……いつもの一日が始まった……

(2)

その日の夕刻……

「松っちゃんは何処に行った？」

神奈川県警横浜中央署真山秀作刑事第一課長が誰にともなく訊いた。

「松岡さん？　そう言えばさつきから見当たりませんよね。トイレじゃないですか？　あー、で

も、それにしちゃ長いか……もしかして、具合でも悪くなったのかな？」

答えたのは川島だった。殺人事件が発生し、緊張感が漂いバタバタしている刑事課の部屋には
ふさわしくないノンビリとした声だった。

「奥さんが、着替えを届けに来ているらしいんだよね」

川島は松岡の携帯を鳴らしたが、自分のすぐそばで携帯の着信音が聞こえた。

「あっ、ここで鳴ってる。携帯を置いていつているから、やっぱり署内じゃないんですか……」

「松っちゃん何処に行ったんだよ……」

「自分が代わりに行きましようか？」

午前中から捜査で走り回り、疲れていた身体を動かすのは面倒だったが、困った様子の真山に

川島が言った。

「頼むよ」

真山課長からそう言われて、川島は松岡の妻が待っているという玄関に向かった。

師走に入り歳末特別警戒が始まった事や、午前中に東神奈川で起きた理髪店夫婦殺害事件があ

った事もあり、警察署の一階はごった返していた。

川島は階段を降りきらない途中でロビーを見下ろし、松岡の妻らしき人物を探したが、それら

しき人は確認出来なかった……と、言うより、松岡の妻を知らなかった……交通課の受付カウン

ターで確認しようと思ったが、交通課は忙し過ぎて相手になしてくれそうにない。

その時、入り口の隅で、申し訳なさそうに立っている女性の姿が目に入った。

「あの人じゃないだろう……」

松岡には似つかわしくはない……今朝、雑談中に「そろそろドライフラワーになりかかっている」と言

った松岡の言葉を思い出した。

松岡は50歳も半ばを過ぎている。だいぶ額も後退しかけた中肉中背の中年男だった。そのイ

メージに添った女性を捜していた。しかし、他にそれらしき人物は見当たらない。

「あの……松岡さんの奥様ですか？」

川島は、松岡の妻らしくない女性に声をかけた。「違います」という答えを期待している自分

があつた。

「はい、松岡です」

声をかけられた女性が、顔を上げて答えた。

「……！」

川島は一瞬、息を呑んだ。

「署内かと思いますが連絡が取れないので、自分が代わりに伺いました。松岡さんにはお世話に

なっています刑事第一課の川島と申します」

思いがけない展開に起立の姿勢で答えた。緊張で声が少し上ずった。

「こちらこそ、いつもお世話になりありがとうございます。お忙しいのに、ご足労をおかけし申

し訳ございませんでした。松岡から頼まりました着替えを持っ
て来しました。これを渡して頂けま

すか」

川島を見る松岡の妻が眩しかった。

「わかりました」

無愛想な言い方になったが、そういう態度を取らざるを得ない
雰囲気松岡の妻から感じた。

精一杯の無理したポーズだった……そうしないと……目の前の
女性がスツと自分の中に入り込んで来ってしまうような気がした……

川島は独身である。今まで恋愛経験がなかった訳ではないが

「結婚」に全く興味がなかった。

警察官になって18年、現在勤務している横浜中央署、その前の勤務地である横浜港湾署、いず

れの署でも、仕事に追われ家庭を顧みる事が出来ず「離婚」の憂き目に会い、子供にも会えずに

淋しい思いをしている先輩刑事を見て来た。好きで選んだ「刑事」の職に就いている限り、余程

の事がない限り「結婚はしない」と考えていた。

だから、同じ刑事第一課の課員の家族に興味を持った事は一度もなかったし、ましてやいつも

コンビを組んでいる冴えない風貌の松岡の家族の事などは考えた事もない。

しかし……目の前にいる自分よりかなり年上であろう「松岡の妻」はどうでもよくなかった。

何故、そんな気持ちになったのかは分からなかった。

「携帯を置いて出かけたみたいで、連絡が取れなくて申し訳ありません」

川島はまた頭を下げた。

「いいえ、返ってご迷惑をおかけしてしまったみたいで。こっちに着替えが入っています。こっ

ちは……あの……炊き込みご飯で握ったおにぎりです。松岡が帰ってくるとばかり思っていました

たので、たくさん炊いたのですが、私一人では食べきれないので、余計な事かと思いますが、お

夜食にでも皆さんで召し上がってください……」

そう言って、川島に紙袋を二つ手渡した。

松岡の妻のほつれ髪が艶かしかった。

「ご馳走になります」

川島は紙袋を受け取りながら頭を下げた。

「よろしくお願いします」

松岡の妻は何度も頭を下げて帰って行ったが、何故か川島はその場から動く事が出来ず、後姿を見つめていた。

妻がエントランスの階段を降りきった時、何処に行っていたのか、松岡が戻って来た。

妻は立ち止まって、手振りを使って何か話をしていた。「着替えを持って来ましたけれど、不在

だったので他の人に渡しました」とでも伝えているのだろう。

松岡が「悪かったな」とでも言っているかの様に、妻の肩を2、3度叩いたのを見た時、川島に嫉妬の感情が沸いた。

「バカな事を……」

ひとり言を言って苦笑いをした瞬間「済まなかったな」階段を早上がりで駆け上ってきた松岡が声をかけた。

「わざわざ届けに来てくれたんだから、ちゃんと居なくちゃダメじゃないですか。何処に行っていたんですか？」

心の動揺を隠すように、怒った風に言った。

「今夜は署に缶詰だ。だから気分転換に外に煙草を買いに行っていたんだ。それに、こんなに早

く来るとは思わなかったんだよ」

「夜食用にと、炊き込みご飯で握り飯も用意してくれてますよ」

「なんだ、余計な事をして。たいして美味くもないのに……」

川島から手渡された紙袋の中身を確認しながらの言葉とは裏腹に「嬉しい」という気持ちが表

情に表れていた松岡を見た川島に、再び嫉妬の感情が沸いた。

「神奈川区広台太田町二丁目、カットサロン『スパイク』で、中年男性と中年女性の絞殺体を発

見」の臨場要請を告げる署内放送が流れたのが午前11時半。

管轄である横浜中央署刑事第一課

強行犯係の捜査員と鑑識は現場に急行した。

明らかに事件性を物語っている死体を確認し「帳場」が立てられた。

所轄の刑事はすぐに現場の聞き込みに走った。神奈川県警本部捜査一課の応援を仰ぎ、横浜中央

署がそのまま特別捜査本部になった。まもなく、捜査会議が始まる。初動捜査を終えた所轄の刑

事全員は顔を揃えていた。

「当分、帰れそうにないな。お前は準備してあるのか？」

松岡が川島に訊いた。

「自分は、一週間分の着替えをいつもロッカーに用意してあります」

訊かれて、川島はぶっきらぼうに答えた。

「いい心がけだな」

松岡が川島の肩を叩いた。

……松岡さんの様に、届けに来てくれる相手はいません……
その言葉を呑み込んだ。松岡が癪
だった。

2

(1)

東神奈川で起きたカットサロン店主夫婦の事件は、思いがけ
ず早い段階で解決をみた。

カットサロン「スパイク」は、最近増えだした「1, 500円
カット」が売り物のカット専門店
で、反町に二号店を出す程に店は繁盛していた。

事件は「怨恨」の線が有力で、初動捜査の段階で数人の容疑
者の名前が挙がっていた。事件発

生3日後に、反町店の店長である被害者夫婦の甥で、容疑者の
疑いが濃かった小松肇が自首をし

てきた。動機は単純だった。加害者である小松肇の運営方針と
技術に疑問を抱いていた被害者の

小松洋一郎との間にはいさかいが絶えず、小松洋一郎が店長更
迭を画策している事を嗅ぎつけた

小松肇が、話をつけるために訪れた際、話し合いが不調に終わ
り、カットとなった肇が二人を絞殺
した。

署に缶詰状態は思いがけず3日で解かれた。

「わざわざ、県警本部から出っ張って来る程ではなかったのに。所轄の実力を思い知ったか」
と、陰口を言われながら県警本部の応援部隊は引き上げて行った。

「お前はカニは好きか？」

川島がデスクでパソコンを使って事務仕事をしていた時、隣の席の松岡が訊いてきた。

クリスマスも過ぎ、年の瀬も押しつまっていたが、担当している事件もなく平和な一日だった。

「はあ……？ カニですか……？」

「うん、タラバガニだ」

「好きですけど、余り食べた事ないです……って言うか、食べられる様な身分じゃないし」

「隣からカニをもらったんだ。どうだ？ 今晚、俺の家で一杯やるか？」

川島は松岡から誘いを受けた。

「今晚……ですか……でも、いいんですか？」

「いいから言っているんだよ」

「そうですか……」

「なんだよ、用があるならハッキリ言えよ」

「いえ、特に……」

「どうするんだよ？」

「じゃあ、有り難くお邪魔します」

川島は答えた。

「そう来なくちゃ。おっ、6時だ。行くか！」
そう言って、松岡は早速帰り支度を始めた。

「エーッ……！」

川島は慌てた。まだ、心の準備が出来ていなかった。

「課長、自分と川島は今日これで上がらせて頂きます」
松岡は席を立ち、刑事第一課長である真山に断りを入れた。

「お疲れ！」

課長の真山が顔を上げて答えた。

「おい、帰るぞ」

松岡は帰る体制になっていた。

「ちよっ、ちよっと……待ってください」

「お先に失礼します」

川島が急いでパソコンをシャットダウンし、課長と係員に挨拶をしてコートを手に取った時

には、松岡はすでに廊下に出ていた。

「急に伺って、奥さんはビックリするんじゃないですか？」
松岡の妻の顔が浮かんだ。

「大丈夫だよ。もう準備をして待っている」

「……？」

松岡に誘われてから、まだ15分と経っていなかった。いつ、妻に連絡を取ったのだろう？

もしかしたら、既にそういう話になっていたのかもしれないかった。

「今晚、署の若いのを連れてくるぞ」

「分かりました。カニの他に何を用意すればいいですか？」

「刺身でも用意しておいてくれ。それから、お前の自慢の手料理も」

川島の承諾を得てもいないのに、そんな会話を交わしたのかもしれない……妻は、夫の言葉

を信じて準備をする……夫婦と言うのはそういうものなのか？

「お前も今年一年頑張ってくれたから、お疲れさん会と忘年会だ」
廊下を歩きながら松岡が言った。

署内で、こんなに嬉しそうな顔をする松岡を見るのは久しぶりだった。

「遠慮なくお邪魔します」

二人は松岡のマンションに向かった。

「あつ、ちょっと待ってください」

マンションに向かう途中にあるスーパーマーケットの前で川島は足を止めた。

「何だ？」

「すぐに戻ります」

松岡の問いには答えず、川島はスーパーの中に消えて行った。しばらくして出て来た時には、

可愛い花の鉢植えを抱えていた。

「ジュリアンか？」

川島が抱えている鉢植えを見て松岡が訊いた。

「手ぶらでお邪魔しては申し訳ないので……」

「気を使うなよ」

「はあ……」

……気を使う……それだけではない。先日会った松岡の妻とジュリアンの花を重ね合わせて

いた……「花」……今日は、薄いピンクを選んだ……

「あそこだ……」

マンションに着いた松岡は、三階のベランダを指さした。

カーテン越しに部屋の灯りが漏れていて、その灯りが川島には温かく感じられた。松岡が少し羨ましかった。

松岡は、毎日帰る度にこうして自分の部屋を見上げ、漏れる灯りに安らぎを感じているのだろうか……

「お洒落なマンションじゃないですか？」

ベランダの腰板が、淡いグリーンのカーボングラスになっているマンションを見上げながら

川島が言った。妻同様、松岡には似つかわしくなかった。

「ローンが終わる頃が俺の人生が終わる頃だ。官舎よりずっといいよ。金に代えられない価値

ってやつだな」

松岡は持っていた鍵でオートロックを解除した。

「自分で開けるんですか？」

「そうだよ。まだるっこしい事は俺の性に合わない」
何故か、川島はホッとした。

「たくさん食えよ！」

横浜市神奈川区片倉にある松岡のマンションのリビング・ダイニングルームのテーブルの上

には、カセットコンロにかけられた土鍋から出汁の香りが漂い、タラバガニが所狭しと用意さ

れていた。

「おい！　ちょこちょこ動いていたらゆっくり出来ない。いい加減にお前も席につけ！」

居心地が悪そうにしている川島を見て、松岡が妻に声をかけた。

「これが最後よ」

酢の物が入った小鉢をそれぞれの前に置いて妻は席についた。

鍋の他に、刺身の盛り合わせや漬物など、美味しそうな手料理が並べられていた。

……誘いを断っていたらどうなっていたのだろう？　自分の

思い通りにならず、カニや豪華な刺身の盛り合わせを持て余し、妻を前にして不機嫌そうに酒を飲んでいたのだろうか……？

二つ返事で承諾した事を少し後悔した。松岡に対して意地悪な気持ちを持つ川島が存在していた……

「紹介するよ、と言っても初対面じゃないだろうが、俺の面倒を見てくれている川島君だ。化

石のような俺に我慢して付いて来てくれている。こっちは化石の一步手前の瑛子。お前からも

ちゃんと礼を言え！」

恐らく、普段は妻の前でこんなに横柄な口の利き方をしないのだろう。「俺の女房だ」と、

夫婦であるという事を、自分の前で誇示したいような松岡の態

度に、川島は不快な気分になった。

「化石とは上手く表現したのね。本当にいつもありがとうございます」

瑛子が松岡の言葉を受けて、笑いながら川島に頭を下げた。

「面倒をみてもらっているのは自分の方です」
少し癪だったが、川島も素直に頭を下げた。

「どうぞ」

瑛子にビールを勧められて、川島はグラスのビールを一気に飲み干した。

何故、意地悪な気持ちか沸き、癪に障ったかは分からなかったし、それに、何故か居心地も良くなかった。それでも宴は始まったばかりで、このもやもや感を晴らすには早く酔いつぶれたかった。

「ほら！ 取り分けてやれよ！」

また、松岡が瑛子に命令口調で言った。

「気が利かなくてごめんなさい」

瑛子はそう言いながら、鍋の中で良い具合に煮えている野菜やかニを器に取り分けた。

「ありがとうございます」

札を言った瞬間、瑛子と目が合った川島はさりげなく視線を逸らした。

カニと手料理と酒は美味しかったが、会話は余り弾まなかった。松岡が何かにつけ、命令口

調で瑛子に物を言うような所も気に食わなかった。瑛子は、そんな松岡に黙って従い、一生懸

命川島に気を使っていた。

「だいぶ酔ったな」

空になったカニの足がテーブルの上に沢山散らばった頃、松岡は急に立ち上がり、ヨロヨロとした足取りでソファーに横になった。

「川島さんに失礼でしょう？」

瑛子が呆れた様子で言った。

「悪いな。お前が来てくれて嬉しかったんだよ。それもあって、今日は酔いが回るのが早い。

少し寝かせてくれよ。だが、お前は遠慮せず、ゆっくりして行けよ」

「はあ……」

「大丈夫なの？」

瑛子が心配そうに声をかけたが、酔いつぶれた松岡はソファで鼾をかき始めた。

(2)

「初めてなのよ。主人が部下を連れて来たのは。それなのにお

客様をほったらかしにして寝ち

やうなんて。ごめんなさいね」

夫の様子に、瑛子が申し訳なさそうに謝った。

「カニはね、毎年お隣から頂くの。お隣はカニが苦手らしくてね、でも、大事な仕事関係の人

なので『苦手』とは言えないみたいなのね。今までは、主人の妹夫婦にお裾分けしていたのよ。

でも、今年は署の部下を誘う、って。『署の部下』って川島さんの事。川島さんとペアを組め

ている事が嬉しいのよ。本人が言う様に、こんなに早く酔いつぶれたのがその証拠」

「松岡さんとはいつもぶつかって……自分は、生意気な事ばかり言っているんですよ」

「それが嬉しいのよ。私からも改めて御礼を言わせてくださいね」

瑛子は改まって、川島に礼を言った。

「じゃあ、もう少しお邪魔していてもいいですか？」

意地悪な気持ちは何処かに吹き飛んでいたが、癪に障る気持ちは残っていた。

「松岡もそう言っているでしょう。川島さんを早く帰したら、また私は怒られそう。たくさん

飲んでくださいね。はい、どうぞ」

お酒を飲んでいる瑛子の頬がほんのり赤く染まっていた。定年間近い松岡の妻の瑛子は、自

分より遥かに年上だろう。長い間、松岡の「妻」だったという自信と安心感が感じられたが、それ以上に「大人の女性」の雰囲気は漂っていた。

松岡が寝入ってから、何故か瑛子は饒舌になり、二人の会話が弾んだ。

「もうすぐ50歳よ。結婚して20年。長いでしょう？」

「結婚願望がない」という「川島の結婚観」の話題が終わった後、突然瑛子がそう言い出した。

「……」

酔いがまわるのも早くなっていた。そのせいか、余り自分の事を話すのが好きではない川島も饒舌になっていたが、瑛子の一言で、一瞬酔いが覚めた様な気分になった。

「自分の中で、そういうのよく分らないんです」

「そうよね……」

そう言って瑛子は俯いた。

二人の間に沈黙が流れた。

川島は俯いている瑛子を見ながら、お猪口の酒を飲み干した。クラツとした……それは、酒のせいではなく、瑛子の物淋しげな雰囲気のせい……だと思った。

「あー、もうこんな時間だ……」

川島が腕時計を確認した。時間は10時半を回っていた。

「警察の独身寮にお住まいなの？」

「いえ。松岡さんと同じで寮は出ました。ああいう所苦手なんです。今は篠原です。岸根公園

駅から歩いて10分もかかりません」

「じゃあ近いのね。これに懲りずにまた遊びに来てくださいね。それから、主人の事もくれぐ

れもよろしくお願いします。主人はあんなだけど、根は優しいのよ。ただ、不器用だから上手

く伝えられなくて」

瑛子の会話には「主人」という言葉がたくさん登場していた。

川島が汚れた食器をキッチンに片付け始めた。

「いいのよ。そのままにしておいてね。明日も早いのでしょう？」

「いいんです。やらせてください」

川島は、片付ける手を休めなかった。

「子供の頃、こうやって手伝いをしたんです」

瑛子は「やらせてください」と言う川島の好きなようにさせた。瑛子が洗剤を使って汚れた食器を洗い、隣で川島はお湯で洗っ

た食器を水切りカゴに納めた。

時々、漏れてくる松岡の寝息を聞いてはいたが、二人だけの穏やかで静かな時間が流れている

様にお互いが感じていた。

「居心地がいい……」

ポツリと川島がつぶやいた。

……さっきまでは居心地が悪かったのに……

「何が？」

瑛子が訊いた。

「こうして手伝いをしている事が……」

川島が布巾で拭いた食器を瑛子が食器棚に納めていた。

「相性がいいのよ。きつと……」

最後の食器をしまい終わった瑛子が言った。

「相性……？」

「川島さんと私……後片付けの……ね」

最後の言葉は言い繕っている様に聞こえた。

「はあ……」

片付けが済んだのに、川島は流しの前に立ったままだった。

「どうしたの？　ぼんやりして」

……ぼんやり……

「僕、ぼんやりした子だったんですよ」

川島はキッチンの流しに寄りかかって、突然話を始めた。

当時、男の子に人気のあった超合金の合体おもちゃには全く興味がなく、一日中虫取りや、

ザリガニ取りに明け暮れていた川島は要領が悪かった。一緒にいる友達は、クワガタやかぶと

虫、ザリガニを沢山取っているのに、川島の虫かごは空っぽの事が多く「ぼんやり達也のヘタ

クソ!」といつもからかわれていた。勉強は出来たが、学校でもぼんやりしている事が多く

「川島君……」授業中に先生からよく注意された。

両親は、川島が小学校一年生になった年に離婚をした。

原因は、友人と人材派遣会社を共同経営している母の志津子が家庭を顧みなかった事と、双方

の異性問題だった。

当時は今と違って「人材派遣」の需要が少ない時代だったが、今後「派遣雇用」の形態が増

加すると考えていた志津子は、生活の全てを仕事に費やしていた。川島は、仕事が忙しい母に

代わって、同居していた志津子の母の山内ゆき子に育てられたが、決して「おばあちゃん子」

ではなかった。ゆき子は実の娘の志津子に遠慮している様なところがあつて、孫の川島に対する態度にもそれが充分に表れていた。

「お母さん、いい加減にして。達也を甘やかさないでね。やる

べき事をきちんやらせてね」

夜遅く、仕事から帰って来た志津子に叱られている祖母を何度も見てきた。

「達也、ぼんやりしていちゃダメなのよ。男の子だからね、男の子はね……」

志津子は達也にもいろいろな事を要求した。だから、窮屈で息苦しかった。でも、母は大好

きだった。勿論、祖母も。仕事を持つ母と、遠慮している祖母に「愛されている」という事を

感じていたが、ただ、時々不安になる事があった。二人とも、よくため息をついていた。ため

息をつく時の母と、祖母は辛そうな顔をしていた。

「僕が悪いのかもしれない……」

ため息をつく母と祖母を見ている間に、そう思うようになり、ため息をつく事がなくなる様

に、二人に気に入ってもらえる様に「ぼんやりしていちゃダメだ、良い子にならなくちゃいけない」そう考えた。

しかし、川島の努力は無駄になった。幼稚園の年長組に上がったと同時に祖母のゆき子が亡くなり、それから一年後に、母の志津子家が家を出て行った。

川島が小学二年生の春に、父の俊郎は子連れ同士の再婚を果たした。川島に年子の血の繋が

らない弟と、生まれたばかり腹違いの妹が出来た。継母の美奈代は、家庭的な女性だった。

美奈代には、ため息をついて欲しくなかったから、それに気に入ってもらいたかったから、

川島は言う事を聞いて「良い子」になる努力をした。でも、基

本の「ぼんやりした子」は消え

なかった。血の繋がりのない弟は「利発で要領の良い子」で「良い子」になろうとする川島の

上を行っていた。進んで美奈代の手伝いをして父の俊郎からも可愛がられていた。負けたくなくて、弟と競った。

ある日、学校から帰るとお客様がいた。美奈代の実母の恵子だった。

「こんにちわ」

川島がきちんと挨拶をすると恵子が褒めた。おやつをもらって、自分の部屋に行こうとした

時「達也君はどう？」恵子が美奈代に訊いている声が聞こえた。

川島は足を止めて、二人の会

話に聞き耳をたてた。

「いい子なんだけど、ちょっとぼんやりさんで。一生懸命お手伝いをしてくれたりするけれ

ど、返って足手まといになったりするの。人に気を使わせる子って……ああいう子供の事を言うのよね」

美奈代が答えた。

川島は手に持っていたケーキを落とした。物音に気付いた美奈代が慌てて廊下に出た時には

川島は自分の部屋に逃げ込んでいた。

決めた……努力をするのはやめよう……「ぼんやり」な子でいよう……嫌いだ！……ため息

をいっばいつかしてあげよう……そして、心を閉ざした……

「自分の不用意な言動であの子が傷ついた」分かっていた美奈代は、川島に人一倍気を使って

接する様になった。川島も表面的には何気なさを装っていたが、美奈代にも、誰にも心を開かなかった。

別れた実母の志津子とは定期的に会っていた。でも、もう川島はその母にも心を開こうとはしなかった。

「いつまでもぼんやりしていちゃダメよ」
心を開かない息子を見て、志津子は川島にそう言った。

「ぼんやり……？ 違うんだよ、母さん」
川島は心の中で訴え続けたが、自分を一つの方向からしか見ようとしなない母親にも、益々心を閉ざした。

「何処かに自分をちゃんと見てくれる人がいる。いつかそういう人に巡り合う事が出来るかもしれない……」
ずっと夢見ていた。

「はいっ、熱いから気をつけてね」
瑛子は、立ったまま話をしている川島に熱いほうじ茶が入った湯飲みを渡した。

「美味しい……」

香ばしいほうじ茶をすすった川島が笑みを浮かべた。熱いお茶が胃に沁み渡って温かく穏や

かな気持ちになった。それは……瑛子の気持ちの温かさに川島は感じた。

瑛子も川島の隣で立ったままでお茶を飲んでいた。

「ぼんやりって、ちょっと違うかい？」

「そうかなあ……？」

「だって、お母さんとおばあちゃんのため息を気にしていたなんて……神経のある子供だったのじゃないの？」

「神経のある子供……って？」

「神経が細やかで、優しい子」

「どうなんだろう……」

「辛かったの？」

「辛くはなかったけれど……」

「どうした？ 何が辛いんだ」

ソファで寝入っているとばかり思っていた松岡が言った。

……二人だけじゃなかった……川島は松岡の存在をすっかり忘れていた。

「聞いていたの？ 川島さんの子供の時の話よ」
瑛子は松岡の傍に行って話しかけた。

「そうか……」

そう言っつて松岡はまた眠りについた。

「変な人……」

瑛子と川島は顔を見合せて笑った。

「辛くはなかったんですけどね。でも、辛い、って思った方が
良かったのかもしれない」

「どうして？」

「感情がないみたいな気がして……」

「どうして警察官になったの？」

「うーん……人を裁きたかったから」

「裁くのだったら裁判官じゃなかったの？」

「人間が嫌いになったんです。だけど、それじゃいけない、そ
う思っつて。刑事になったらしいろ

んな人間模様が見れるかなあ……っつて。テレビの見過ぎだった
かもしれないけれど」

「……」

「あつ、でも、彼女とかはちゃんといたんですよ。でもね、い
つも言われてた。川島君の世界
には入れない、って。マイペースで、ぼんやりしてたんですよ。
きつと」

「静かな感情？」

「エッ……？ 僕の中では静かじゃない……」

「良かった……」

「どうして？」

「静かな感情が怖かった時があったの」

「分からない」

「分からなくていいのよ。私の方があなたより長く生きている
んだから」

「……」

二人の視線が絡み合った。

「すっかり綺麗になって。お陰で助かったわ」
重い空気を振り払うように瑛子が言った。

「じゃあ、これで失礼します」
川島は帰り支度を始めた。

「可愛いお花もありがとうございました」

「ジュリアンの鉢植え……あの日、松岡さんが署に見えた日……」

川島は敢えて「奥さん」と言う言葉を使わなかった。

「私が署に行った日？　主人の下着を届けに行った日の事ね」

……主人の下着、という言葉が川島の胸に刺さった……

「朝、出勤する時に、近所の花屋で同じ鉢植えを買ったんです。殺風景な署の部屋に飾ろうと

思っ。部屋が明るくなったけれど、みんなにからかわれちゃいました」

「川島さん、やっぱりぼんやりしてないと思うの。神経が細やかで優しいのね」

「そんな事ないです……」

「主人は川島さんとコンビを組めて本当に幸せだと思うわ」

「面倒な荷物抱えちゃって、運が悪いって思っているかもしれないよ」

「主人の事は良く分かるの」

……主人の事が分かる……瑛子の言葉に川島の胸に嫉妬の気持ちが沸いた……

「松岡を起こすわね」

瑛子はソファで寝入っている松岡を揺すったが、完全に寝込んでいたのか、松岡は目を覚まさなかった。

「そのまま寝かせてあげておいてください」

……起こさなくていい……川島はそう思った。

「本当に失礼な人よね」

そう言いながら玄関まで見送ってくれた瑛子の手に、川島は小さな紙切れをそっと渡した。

瑛子は怪訝そうな表情で、チラツと紙切れに書かれた文字を見たが顔色一つ変えなかった。

……紙切れには川島の携帯番号が書かれていた……

「おやすみなさい」

外に出て、ドアの鍵とチェーンをかける金属音を聞いた川島は、ドアの向こうにはまだ瑛子がいるという事を感じて、しばらくの間じっとドアを見つめていた。

川島が出てすぐに鍵とチェーンをかける、という瑛子の動作が心の動揺を表している様に感じられた。

マンションのエントランスを出て、三階にある松岡の部屋を見上げた。

カーテン越しに動いている人影が見えた。一つの影がかがんで、少しすると二つの影がもつれ

るように消えて行く様を確認された。

瑛子がソファで酔いつぶれている松岡を起こし、抱えて寝室に連れて行ったのだろう。ま

た、嫉妬の気持ちが始まったが、川島はそのまま動かず部屋を見つめていた。しばらくす

ると、また一つの影が戻って来て、カーテンを少し開けかけたが、カーテンは開かなかった。

リビングルームの灯りが消えた。

「かかってくるだろうか？」

ズボンのポケットから携帯電話を取り出して、携帯電話をじっと見つめた。

3

(1)

年が明けた……

松岡と川島は横浜中央署管内で起きた、女性連続殺傷事件の聞き込みの最中だった。

最初の被害者は、年末年始から実家に帰省し、深夜、自宅であるテラスハウスに帰って来た

所を襲われ、太ももを鋭い刃物で切られ全治一ヶ月の重症を負った。

一週間も経ない間に、一件目の現場から約200メートル程離れた、家具付きのワンルーム

マンションのエントランスで、仕事帰りの女性がやはり刃物で襲われ、その女性は命を落とした。狙われた相手が20代の若い女性である事や手口などから、同一犯の可能性が高かったが、容疑者の断定はまだ出来ていなかった。

「飯でも食うか」

「はい……」

「食える時に食っとかないとな。今日は長くなりそうだ」
二人は立ち食い蕎麦屋に入った。

蕎麦を食べている最中に、川島の携帯が鳴った。慌てて画面を確認すると、見知らぬ番号が表示されていた。

「出ないのか？」

鳴りっぱなしの携帯に応えない川島を見て、松岡が訊いた。

「おふくろです」

「出てやれよ」

「いいです。後でかけ直します」
そう言っ、川島は無視をしたが、少しすると呼び出し音は鳴り止んだ。

……相手が誰だか分かっていた……出るわけにはいかない……

聞き込みを終え、署に戻った川島はそのまま屋上に上がり、携帯を取り出し着信履歴を確認

して、発信ボタンを押した。

「もしもし……」

ハスキーな女性の声が応えた。

「川島です。昼間は聞き込み中だったので電話に出れなくすみません」

相手の名前を確認しなくても、声を聞いただけで誰だか分かった。

「お仕事中にごめんなさい」

「いいんです。電話を頂いてありがとうございました」

「……」

瑛子は察しているだろう。昼間、川島の隣に誰がいたのかを。

会話が途切れた。

好意を抱いた女性に電話番号を教え、長い間待ちに待った電話がかかってきた……「今度、

食事でもどうですか？」などと、簡単に言える間柄ではなかった。

「携帯の電話番号を教えて頂いたから、何か、主人の事でお話でもあるのかと思って……」

「そういう事ではありません」

……そうか……でも、本当にそう思っているのだろうか？……
…そうだとしたら、もっと早く
に電話がかかってきた筈だ……

「会いたかったからです」

素直に答えた自分に驚いた。

「私に？」

「そうです。この間、居心地が良かったから……あなたという
と優しい気持ちになれる」

また、沈黙が流れた。

「どうして？」

……好きだからです……でも言えなかった。

「迷惑ですか？」

「ううん、でも、ちょっとビックリ」

「初詣に行きましょう」

携帯の向こうにいる瑛子が笑った。

「可笑しいですか？」

「私と初詣に行ったら、あなたは、今年一年、また松岡に縛られる事になるかもよ」

自分との間に、二回も松岡を登場させた瑛子の返事を聞いた時、川島は事の重大さに気付いた……でも、後戻りはしない……

「それは自分次第です。嫌ですか？」

「そう……ね。誘って頂いて嬉しいけれど……」

……嬉しい………

「じゃあ、決まり！ という事で。今、抱えている事件が解決した非番の日に。約束してもらえますか？」

「……」

瑛子からの返事はなかった。

「決まったら、今度は僕から連絡します」

そう言って、川島は一方的に電話を切った。

すぐにまた携帯が鳴った。

「何処にいるんだ？ 捜査会議が始まるぞ」
今度の相手は松岡だった。

「すぐに行きます」

慌てて戻った。

合同捜査会議室に着くと、捜査本部長である署長が席に着き捜査会議が始まろうとしていた。

川島は松岡の隣の席に着いた。

「用は済んだのか？」

松岡が怒った様な表情をして小声で訊いた。

「はい……」

松岡の目が見れなかった。

「こういう時は勝手に消えるな。トイレに行くんでも必ず行き先を言うておけよ」

「……」

自分だって……去年末、カットサロン店主殺害事件の捜査会議が始まる前に、行き先も告げずコンビニにタバコを買いに行った松岡の事を思い出した……腹が立った……でも……そのお陰で……怒りが消えた。

(2)

「どっちにしようかな？」

瑛子は、久しぶりに出かけた横浜のショッピングビルにあるアクセサリーショップで、若い

女の子に混じって、鏡の前で二つのピアスを手に取って迷っていた。

一つはいぶし銀の大きなフープピアス、もう一つは小さなパールがゆらゆら揺れた可愛いピアス。

鏡の前でパールのピアスを耳にあてた。

……これはちょっと子供っぽいかな……？

「こっちの方がいい」

後ろで優しい声がした。

鏡の中で川島が、いぶし銀のフープピアスを指差していた。

瑛子は振り返った。

「このピアスには、Vネックのシンプルなセーターが似合う」
川島は笑っていた。

「驚いた！」

瑛子は心の中を見透かされたような気がした。川島から……いつか誘われる「初詣」のためのピアスだった。

「どうしたの？」

「はい」

川島は右側の頬を押さえた。

「この上にある歯医者に行くんです。エスカレーターに乗ってたら見かけたので……」

「歯が痛いのか？」

「……」

川島は黙って頷いた。

「ずっとほったらかしにしていたから、罰をうけた」
マンションにカニを食べに来た時と違って、話し方が甘え口調だった。

「ダメじゃない。身体が資本なんだから、ちゃんと健康管理をしなくちゃ」

「反省」

そう言って笑ったが、歯が痛いのか顔をしかめた。

「ほら、早く行かなくちゃ」

「行きます。ピアスはこっちでね」

また、川島がフープピアスを指差した。

「そして、シンプルなVネックのセーター」

「色は白。ピアスが映える」

川島が見せる少年の様な無邪気な笑顔が魅力的だった。

「連絡します」

そう言って、川島はエスカレーターに向かった。

エスカレーターに乗った川島に手を振った瑛子はレジに向かった。

恋を知った少女の様な気分になった。

一時間後、瑛子は、駅ビルの地下にある食鮮館に降りるエスカレーターに乗っていた。

いつまでも恋する少女の様な気分ではられない。夕食の支度が気になる主婦の顔に戻っていた。

携帯が鳴った。

エスカレーターを降りきった所で電話に出た。

「何処にいますか？」

名前も告げない……勿論分かっていたが……突然、川島が訊いてきた。

「今？ 駅の地下街の何処かのカフェでコーヒーでも飲もうかな？ と考えていたところ……」

瑛子はウソを言った。「夕食の買い物」と生活感は見せたくなかった。携帯を耳に押し付け

周りの気配が伝わらないように、急いで反対側にあるエスカレ

ターに乗って今度は上に昇った。食鮮館では、タイムサービスを告げるアナウンスが流れていた。

「じゃあ、コーヒーを飲むのは少し我慢して。僕は今日これであがり。松岡さんは定時であがった後、課長と飲み会。僕も誘われたけれど辞退……と、いう事で、これから鶴岡八幡宮に初詣に行きましょう。横須賀線のホームの中程の階段で待っていますから」

川島が告げた事の意味を考えた……松岡は課長と飲み会……帰りが遅い……夕食の支度はしなくて済む……だから、時間は大丈夫。

「でも、フープピラスもしていないし、白のVネックセーターも着ていないの」

……断った……つもり……

「それは次の時で。ホームで待ってます」

「分かりました」

決して強引ではない……川島の誘いに乗るしかなかった……その誘いを待っていた。

改札口に向かう途中でまた携帯が鳴った。今度は松岡からだった。

「今日は課長に誘われたから夕食はいらない。帰りは遅くなるよ」

ぶっきらぼうに自分の用件だけ言って、電話を切った。

いつもの事だが、今はいつもの事の様には思えず、瑛子は周りを見渡した。松岡が何処か

で自分の行動を見ている……そんな気がした。

少し躊躇ったが、そのまま改札口に向かった。改札口に向かう間、駅構内の鏡で自分の姿

を写した……こんなに、おばさんなのに……また、躊躇いの気持ちが沸いたが、何かを振り

切る様に瑛子は改札口を通った。

「早く、早く」

瑛子が、横須賀線ホームに続く階段の下から見上げた時、川島が手招きしていた。夢中で

階段を駆け昇ったと同時に、ホームに横須賀線が滑り込んできた。

「セーフ」

「ちょっと、ちょっと、おばさんだからキツクて息も絶え絶えよ」

「じゃなくて……運動不足」

少年のような笑みを見せた。

二人は横須賀線に乗り込んだ。平日の午後でも電車は結構混

んでいた。ドアと、座席と手

すりの間に瑛子を守る様にして、川島は立った。瑛子はまた周りを見渡した。人の目が気に

なった……疚しい事をしている、という事ではない……こんなおばさんと……川島……

鏡で今の二人の姿を映して確認したかった……

「電車から景色を見るのが好きなんです」

外の景色を見ながら川島がポツリと言った。

「……」

「電車は一番前に乗る。地下鉄はダメだけど東横線は外が見える。バスも一番前の一人用の

席」

「……」

瑛子は川島の横顔を見ていた。遠くを見つめる川島の表情が幼なかった。

「アッ！ 猫！」

突然川島が声を上げた。

「猫？」

「マンションの窓辺に猫が座っていた。僕と目が合ってた。楽しんで来いよって」

瑛子は笑って、また川島の横顔を見つめた。真剣な表情をし

ていた。ぶっきらぼうな言い

方でも、松岡とは違う。「松岡のぶっきらぼうさ」は、長い間夫婦をしている馴れ合いだった。

だが「川島のぶっきらぼうさ」は、甘えている様なところがあって、それが新鮮で嬉しかった。

……松岡と川島を比べている事に気がつき、戸惑った……

……不思議な人……不機嫌そうな表情をしているが、決して不機嫌ではないのだろう……

この人は、松岡と一緒に仕事をしている時はどんな表情をしているのだろう……？

カニを食べに来た時の川島を思い浮かべた。ごく普通の「夫の部下」の顔をしていた。

「変？」

川島が瑛子に向いて訊いた。

「ううん、変じゃないけど……」

川島の表情は「夫の部下」ではなく「一人の男」だった。

電車が揺れた拍子に、バランスを崩した川島が瑛子に倒れかかり、咄嗟に出した瑛子の手を握った。

「なんか、映画のシーンみたいだ」
手を握ったまま、川島がニコツと笑った。

「……」

……映画のシーン……瑛子は、自分を制する事が出来そうになかった……透明で少年の様

な魅力がある川島といると、自分の中で忘れていた感情が蘇ってくる気がする……「静かな

感情」が消える……

「あなたを好きになりそう……」

「好きだ……」

言葉には出さないが、お互いの目がそう伝え合っていた。

躊躇いはあったが躊躇わなかった……そして……始まった。

でも……「始まった」とは考えなかった。「始まり」には「終わり」がある。日々の中での

自然の出来事……愛を確かめ合う言葉も言わなかった。言わなくても充分に分かっている……

互いの目を見れば……「始まり」がなければ「終わり」もない。自然の成り行き……「一緒

にいて幸せ」その時間だけを大事にしていた。

松岡が住むマンションの敷地にある数本の桜も満開になった。六角橋にある官舎から今のマンションに移り住んで4年半。初めての春を迎えた年、敷地に

咲いた桜を見た瑛子が「此処に引越して本当に良かった」そう言っ て目を輝かせた。

結婚してからも職務に追われ、満足にお花見も出来ない松岡と瑛子にとって、自宅マンシ

ョンに咲く桜を見るのが楽しみになった。桜の咲く時期になると「出かけるぞ」と言う松岡

を、瑛子は玄関先で見送らず階下に降り、署に向かう松岡と一緒につかの間の桜見物を楽し

み「行ってらっしゃい」桜の木の下で松岡に手を振った。

今年もまた同じ事をする瑛子がいた……しかし、何か違う……桜を見る瑛子の瞳の中には、

松岡とは別の何かが存在している……

瑛子の様子が変だ……松岡は気付いていた。

「いつ頃からか……そうだった。一月の終わり頃からだ……だが、それよりだいぶ前、川島

を連れて来た頃を境に……瑛子の雰囲気が変わった。昔、出会った頃の瑛子になった」

松岡家では、松岡が非番の日「一人でゆっくり休ませてあげよう」という事で、特別な事

がない限り、午後から2、3時間瑛子が外出するのが長い間の習慣になっていた。一時期、

瑛子はパートで仕事をしていたが、瑛子を選んだ仕事は週末出勤の販売業の仕事だった。松

岡は瑛子が家に居たところで気にはならない。

「私がちょこまか動いていると落ち着かないでしょう？」そう言っているが「瑛子の方が自分がいると落ち着かないのだろう」そう思って、瑛子の好きな様にさせていた。

それが……「ただいま。ゆっくり出来た？」毎回同じ言葉を言うが、外出して帰って来た

瑛子が、その時に限って自分の目を見ない様になった……余り良い気分ではなかった。

そして、横浜中央署でも同じ様な気分を味わっていた。

休み明けの朝「おはようございます」と刑事第一課の部屋に入ってくる川島が自分の目を見なかった……やはり、良い気分ではなかった。

……だから気付いた……間違いないだろう……勘……伊達や酔狂で長い間刑事をやっているのではない……そうではない。夫の勘だ……

瑛子を尾行してみる事にした。そのためにデジカメを購入した。

4月半ばの日曜日、花見の時期は終わったが、天気も良く穏やかないつもの日曜日だった。

「行ってきます！」

いつもと同じ様に出かけて行く瑛子を、松岡はソファーに寝転んだままで見送った。

その日はいつもと同じ様な日曜日ではなかった。

玄関のドアが閉まったと同時に、松岡は起き上がり、頭の中

で時間を計算して外に出た。

北側の廊下から下を見ると、瑛子がマンションのエントランスを出て、横浜市営地下鉄ブル

ーラインの片倉町駅方面に歩いて行く姿が見えた。尾行はお手の物だ。絶対に気付かれる事

はない。松岡は瑛子の後を追った。

地下鉄の階段を降りた所で、改札口を抜ける瑛子を確認した。

時刻表を確認した。あざみ野行きも湘南台行きも、到着までにまだ5分以上の時間があつた。

自動販売機の切符を買う時に、一瞬迷ったが、一番高い料金の切符を買った。

片倉町駅のホームは地下四階にある、エスカレーターを何回も乗り継いでいると、松岡は深い穴にはまり込んでしまう様な気分になった。

瑛子はあざみ野行き方面のホームの黄色いラインの前に立っていた。浮き浮きした様子が行き先を物語っていた。

「切符代を払い過ぎたか……」

松岡の思った通り、瑛子は岸根公園駅で降りた。地上に出て、信号待ちをしている時に誰かに携帯電話をかけた。

駅の階段を昇りきった所で身を隠して様子を見ていた。電話を切った瑛子は交差点を渡った。

……向かう方向は、JR新横浜駅篠原口方面……川島達也のマンション……

「分かっているんだ焦ることはない」

交差点を渡り、角のコンビニで買い物を済ませ出て来た瑛子は幸せそうな顔をしていた。

瑛子は周りを気にする事もなく、そのまま川島のマンションに向かった。5、6分歩いた所

で、歩いた側にある、小綺麗ないかにも若者が好みそうなワンルームマンションに入った。

松岡はマンションを通り過ぎ、少し先の酒屋の自動販売機の陰に隠れた。

三階の廊下を歩く瑛子の姿を松岡はデジカメで撮った。一番奥の部屋の前に立った時、瑛子は

バッグから何かを取り出した。

「鏡か」……その動作が瑛子の気持ちを表していた……また、デジカメで撮った。チャイムを

鳴らすとすぐにドアが開いた。

松岡は夢中でデジカメのシャッターを切った。

二人の姿がドアの中に消えて、松岡は何かにとりつかれた様に川島のマンションに向かった。

気がつくと部屋の前に立っていた。

「川島」の名前が書かれた表札をデジカメで撮り、じっと中の気配を伺った。

コンビニで買った弁当を食べ、お喋りをして、テレビを見て、

オセロゲームやトランプを楽

しむためではないだろう。そこで繰り広げられる事を思い浮かべたが、不思議な事に「嫉妬」

の気持ちはなく……感じたのは「諦め」の気持ちだった。何故、自分がそんな気持ちになった

のか？ 松岡には理解出来なかった。

「嫉妬」……警察官になってから、仲間に対してそういう気持ちを抱いた事もある。「嫉妬」

は場合によっては、自分の励みや自分を高める武器になるが、松岡にとって「嫉妬」は自分自

身を見失う、その事でしかなかった。実際にそういう経験をした事もある。関わった事案で

「手柄」や「出世」に気を取られ、功を焦って真実を見失いそうになった。「自分は、世の中

の善悪と戦う刑事だ。企業に従事する人間とは異なった仕事をしている」松岡理論でそう考え

た時「嫉妬」という気持ちを自分の中で排除する事にした。そして、正しいかどうか分からな

い「松岡理論」で、瑛子を得る事が出来た。瑛子と結婚をして充実した家庭生活があったから、

刑事としての自分に磨きがかかった。

瑛子と知り合ったのは20年以上も前だった。瑛子の実家に空き巣が入り、松岡が捜査を担当した。

母親が台湾人の瑛子は、切れ長の目が涼しい美人だった。8

歳年上の松岡は特に取り立てて

男前でもなく、40歳を目前に控えた極々普通の中肉中背の男だったが、一人娘の瑛子に一目惚れをした。

「分不相応だ」

そう思ったが恋の炎が燃え上がった。事件が解決した後でも「巡回です」とかこつけ瑛子の実家を訪れた。

瑛子が不在でも足繁く通い、思惑通り両親に気に入られた。

しかし、肝心の瑛子は興味を示さなかった。今は結婚適齢期があるようになっていなかったが、当時、28歳という娘の年齢

に危惧を抱いていた両親は「渡りに船」と瑛子に松岡との結婚話を薦める様になった。その事を知った松岡は押しの一手で瑛子に迫り、デートらしき事が出来るまでにはなっていた。ところが、プロポーズをしよう！と決め、指輪を用意していた日……瑛子から告白された。

「私には5年程前から付き合っている人がいます。相手は会社の社長で、世間で言う不倫関係です」

告白を聞いた松岡はショックだったが「そんな事だったのだろう」そう思った。嫉妬の感情はなかった。

「あなたは幸せですか？」
松岡は訊いた。

「幸せです」

瑛子は答えた。

「どうして幸せですか？」

「人を愛しているからです」

「自分は、あなただけを愛しています」

「……」

瑛子は答えられなかった。

「だから、あなたを幸せにする自信があります。今日はあなたにプロポーズをするつもりで来ました。しかし、自分は待ちます。あなたが自分の気持ちを受け入れる時が来るまで。そういう気持ちになったら連絡してください」

松岡はじっと待った。その間「彼女の相手はどういう人だろう？」「今頃、彼女は……」そう

という事は一切考えなかった。ただ、刑事としての仕事に励んだ。

それから半年後、瑛子から連絡があった。

もし、自分が嫉妬に狂い、自分を見失っていたら、この日は来なかった……松岡はそう信じていた。

あれから20年以上経った今、最愛の妻が自分の部下と密会している部屋の前に立っている。

「これは嫉妬なのか？」 自問自答しながら……

松岡は張込み場所を探していた。

「良い張込み場所を探すのも刑事の大事な仕事の一つだ」

「あそこにしよう」

マンションの北西に小さな公園を見つけた。

川島の部屋の前から立ち去ろうとした時、何かが割れる音が聞こえ、松岡は思わず立ち止まった。

姿を見られていないか？ 周りを見て、誰もいない事を確認した松岡はドアに身体を寄せて耳を澄ませた。

「あー、やっちゃったよ」

川島の声が聞こえた。

「怪我はなかった？」

そんな事を言っている様な瑛子の声も聞こえた。

ドアから聞こえて来るのは、ごく普通の幸せそうなカップルの会話だった……いつもの日曜

日、瑛子がそういう会話を交わす相手は、この自分の筈じゃなかったのか？

「嫉妬」の感情が沸いている自分に気付いた。

しかし、松岡はそのまま公園に向かった。

ちょうど張込みに最適の場所も見つかった。大きな木があるから身を隠す事も出来る。

出て来るまでに二時間はあるだろう。

公園のベンチに座って持って来た文庫本を開いた……持って来た本は外国人作家のスパイ小説

だった。本を選ぶ時、直木賞受賞作家の本を手にとったが、思い直して、集中しないと読めない

い本にした……湧き起こるかもしれない「嫉妬」を抑える必要があった……

松岡は本を読み始めた。一頁を読み終えた時、余計な事を考えた。

「勝負だ」

自分を制して本を読んだ。読み進めて行くうちに本に没頭する事が出来る様になっていた。

部屋のドアが開く気配を感じた松岡は腕時計を確認し、慌てて木陰に身を隠した。

「読み通り、二時間」

刑事の勘は正しかった……夫の勘か……

一度開いたドアが閉まり、少ししてまたドアが開き瑛子が出て来た。デジカメを構えた。

川島が姿を現した時、シャッターを切った。

何も気にする事無く堂々と二人はマンションを出て、新横浜駅方面に歩いて行った。松岡も

気付かれない様に、通りの反対側で適度の距離を保ち二人の後を追った。

途中、二人は小さな花屋に立ち寄った。店先に沢山並んでいる綺麗な花の鉢植えを選んでい
る様子の瑛子を見つめる川島の表情が優しかった。

……あんな川島を見た事はない……

松岡は去年末、川島が署に持って来た濃いピンクのジュリアンと、カニを食べに来た日、松

岡のマンションに向かう途中で川島が買い求めた薄ピンク色のジュリアンの鉢植えを思い出し、

何故か……嫉妬……を覚えた。

……嫉妬……

昔、排除しようとした感情とは違う別の感情に戸惑った。二人から目を背け煙草に火を点け

気持ち落ち着かせた。一本煙草を吸い終わった時、鉢植えが入っているであろうビニール

袋持った瑛子が花屋から出て来た。二人は顔を見合わせた。川島を見る瑛子の表情が幸せそう

だった。

……お前のその顔は俺だけに見せるものだろう……更に激しい嫉妬を覚えた……嫉妬……

それは独占欲……なのか？……

堂々と歩く川島とその後を連いて行く瑛子の幸せそうな後ろ姿を見て「愛しているから幸せ」

と言ったあの時の瑛子を思い出した。

「お前は俺を愛していないのか？」

その後姿に向かって松岡は声を出さずに問いかけた。

その日から毎回、松岡が休みの日に外出する瑛子を尾行する様になった。

瑛子が向かう場所はほとんどが川島のマンションだったが、そうではない事もあった。そして、

いつの間にか「瑛子を尾行する事が自分の休日の過ごし方」松岡にとって当たり前の事になった。

いつもの様に、帰った後、自分の目を見ない瑛子。翌日の朝、自分の目を見ない川島。次第に

その二人に、特別な感情を抱く様になって行った。

「嫉妬」なのか？……「嫉妬」を通り越した「憎しみ」なのか

……？ 自分でも分からなかった。

それが……いつからか……二人が自分を排除しようとしている……被害妄想を抱く様にもなって

きた。そういう事件を何件も取り扱っていた。愛人と共謀して妻を、夫を殺害した事件を……

(2)

物思いに耽っていた瑛子はドアフォンが鳴って、我に返った。

「はい……」

「俺だ」

応えたのは松岡だった。

珍しい……松岡は帰宅の際は自分の鍵を使ってオートロックを解除し、ドアを開ける……玄関

に向かう前に洗面所の鏡で自分の姿を確認した。

「お帰りなさい」

玄関のドアを閉めた途端、お酒の匂いがマンションの狭い玄関に充満した。

「あらっ、飲んできたの。今日は早く帰って来るのかと思って夕食の支度をしていたのよ」

「うん、課長に誘われた」

松岡は持っていたカバンを瑛子に渡しながら答えた。

「早く帰って来る……なんて、女の勘か？」

瑛子の背中に向かって、松岡が言った。

「そう、刑事の妻の勘」

松岡を振り向かずに瑛子は答えた。

何か得体の知れない不安が瑛子を襲った……

「俺が時間を作れたという事は、松岡さんも早く帰るということ事だよ。帰る時には、それを心して

いた方がいい」

瑛子は、川島からそう言われていた。

「晩飯は何だ？」

和室で脱いだジャケットを瑛子に渡しながら、松岡が訊いた。

「お刺身とおでんよ……これは何？」

ジャケットを受取った時、ポケットに重い何かが入っているのに気がついた瑛子が訊ねた。

「デジカメだよ」

着替えながら松岡がぶっきらぼうな調子で答えた。

「まあ、珍しい！　こういうのを扱うのは一番苦手なのに……」

「捜査に必要なになったのさ。これがないと現場を押さえられない」

「……」

瑛子の手からデジカメを奪うように、松岡がまたぶっきらぼうに答えた。

「あなたがデジカメ？　意外……でも、苦手なデジタルな物に
関心を示さなくてはならなくなっ

た、という事なのね」

「そういう事だ。面倒くさい世の中だ」

「お食事はどうしますか？」

「せっかく刺身を用意してくれているんだ。食べるよ。熱燗もつけてくれ」

「まだ飲むの？」

「なんだ、飲んじゃ悪いのか？」

「そういう事を言っているのではないのよ。飲み足りないのかな……って」

「……」

「だったら、先にお風呂に入ったら？ 酔いつぶれちゃったらお風呂にも入れなくなるでしょう？」

「風呂は面倒だ。入れる気分だったら入る。入れなかったら、明日シャワーでも浴びる」

「分かりました。すぐに用意しますね。でも、本当に面倒くさがり屋なのね」

絡んで来た松岡に少し不愉快な気分になり、昼間の事もあって後ろめたい気持ちで沸いたが、

笑顔で答えた。

瑛子は素早く、テーブルに卓上熱燗器を用意し、冷蔵庫から刺身の盛り合わせと、コンビニで

買い求めたおでんをテーブルに用意した……全て調理しなくても良い献立だった……

長年連れ添った子供のいない夫婦の会話は少なかった。松岡は黙って、熱燗を飲み、刺身に手をつけ始めた。

「最近、川島が生意気になった」
一本目の徳利が空になった頃、松岡が口を開いた。

「川島さん？ どうして？」
さりげなさを装ったが、松岡の痛い程の視線を感じた。

「俺はいつか、あいつに追い越される」

「そうね、いつか仕事では追い越されるかもしれないけれど、あなたが長い間培った刑事としての勘や、人生では追いつかれる事はないと思うわ」
心の動揺を押し隠した。

「でも、川島さんが生意気になった。という事は、あなたの指導力が功を奏しているって事でもあるでしょう？」

「そうならいい……」

……今日の松岡は変だった……普段は、余り部下の事は話さない。

「仕事が一段落しているなら、今日はゆっくり飲んで。そういう時也需要よ」

瑛子は松岡に熱燗を勧めた。

「お前は川島をどう思う？」

……川島を思い出して瑛子の胸が疼いた……

「どう思う？……って。一回しか会っていないのよ。よく分からないけれど、あの位の年齢が一番良い時期かもしれない」

言葉を慎重に選んだ。

「それが気に食わない」

「そんな事で気に食わないなんて……言っただけで仕方ないじゃない。でも、あなたと同じ年頃になった時にどうなっているか？ そうじゃない？」

「うん……」

「今日は何か変よ。いつもは鍵を使ってドアを開けるのに。それにデジカメも。課長さんとどんな話をしたの？」

「くたびれた親父同士の他愛無い世間話さ」

やはり、いつもの夫ではない……瑛子は、松岡に「静かな怖さ」を感じた。

「こんな事言っただけでも誤解しないでね。やっぱりあなたには事件が必要なのよ。今は少し落ち着いているのでしょうか？ あなたの場合はそれが良い方向には

ならない……でしょう？」

「もう一本つけてくれ！」

「怒ったの？」

「そうじゃない。お前の言う通りだ。事件がないと余計な事ばかり考える」

テーブルの上の刺身もおでんも綺麗に片付けられていた。瑛子は、日本酒を熱燗器にセットした。

松岡は、テレビのリモコンを手に取り、テレビのスイッチを入れた。テレビからは、今人気の
お笑い芸人達の笑い声が聞こえていた。

「くだらない！」

すぐにリモコンを操作してテレビを切った。

松岡は何かに苛立っていた……自分が川島に追い越されそうだからか？……そうではないだろう

う……本当に、課長と飲んだのだろうか……？

「もう、寝るぞ！」

新しくつけたお銚子を半分も飲まないうちに、松岡はそう言
って、ヨロヨロとした足取りで寝
室に向かった。

「大丈夫？」

瑛子は松岡の後を追った。

「刑事バカの刑事さんはゆっくり休みなさいね」

求められそうな気配を感じたが、かなり酔っていきそうな松岡に手を添えてベッドに寝かせ、そ

の気を起こさせない程度に優しく声をかけた。

「明日は6時半に起こしてくれ」

そう言って、松岡は瑛子に背を向けた。

リビングルームに戻った瑛子は、ダイニングテーブルに座って大きなため息をついた。何かが

変わってきている……以前から、少しずつ自分の中で感じていた事が、今日は、ハッキリとした

形になって現れてきた……大きなため息は、それが原因だった。

「幸せ？」

今日の午後、瑛子は突然川島から訊かれた。

「幸せよ」

迷わずそう答えた……しかし、川島の事だけを「幸せ」と思うのは怖いし辛い。川島以外の生

活の中で「幸せ」を見つけ出さないと自分が壊れる……

「考えた事はないのか？」

川島から言われた言葉を思い出していた。

「何を考えるの？」という事は聞かなかった。

（松岡さんと別れると考えた事はないのか？）川島はそう言いたかった……充分分かってる。

問いに瑛子は答えなかった。

その事は考えた事はあるが、気持ちは閉じ込めていた。年齢の差……お互いの立場……真剣に考えられる範囲を超えていた。

そして、今日……問われて「別れたいの」その気持ちが益々膨らんだが、それでも言えなかった。川島と一緒にいる事と同じ位、それ以上に難しい事。

「ごめんね」

黙っている瑛子に川島はそう謝った。

二人でいる時間を辛い時間にしなくなかったから、瑛子は何も答えなかった。

でも、その代わりに、川島のわき腹を人差し指と中指で歩く仕草をしてなぞった……（二人で歩みたい）そういう気持ちを込めた。

「くすぐりたいよ」

川島は瑛子の仕草に無邪気に笑った。

川島の無邪気な笑顔が大好きだった……もし……松岡と別れて川島と一緒にになったら……無邪気な笑顔が消えるかもしれない……怖かった。

……そして、さっきの夫の態度……

瑛子は寢室の気配を確かめた……起きてくる気はない……松岡のカバンから、デジカメを取り出した。

「これがないと現場を押さえられない」
ずっと、松岡の言葉が引っ掛かっていた。

「証拠」……覚悟していたが、それでもショックは隠せなかった。

デジカメの中には「幸せな川島と瑛子」がいっぱい存在していた。

5

一週間後……

朝一番で、事件の被害者の婚約者に会いに行くために車に乗り込み、行き先をナビに入力している所で松岡が川島に言った。

「悪いが、自宅に寄ってくれないか」

「えっ……」

川島はナビ入力の手を止めた。

「大事な物を忘れたんだ……」

聞き込みに行く先は戸塚で、松岡のマンションは片倉町。方角が違うし、時間もかかる。

「分かりました」

川島は車を発進させた。

「すぐに戻るから待っていてくれ」

マンションの前で車を停めた。三階のベランダで洗濯物を干している瑛子が、車から降りてくる松岡に気付いてベランダから消えて行った。川島は恐るべランダを見上げた。松

岡と瑛子の二人の生活を物語る物が干されてあった。一番見たくない光景……川島は下を向いた。

「悪かったな」

5分程して、松岡が手に茶色の封筒を持って戻って来た。

「もう一つ頼みがある。その先の宅急便の配送所に寄ってくれ」

「はあ……」

川島は理解に苦しんだ。宅急便を出すのなら、わざわざ取りに寄らなくても瑛子に頼めば

いいのに……

配送所の事務所に消える松岡の後ろ姿を見ていた。

「着払いの送り状をください」
配送所の受付で松岡はそう言った。荷物の発送依頼はしなかった。

送り状を受取った後、持って来た封筒からエアクッションに包まれている小さな物を取り出し、付いていた送り状を剥がしカウンターの脇のゴミ箱に捨て、封筒と小さな物をポケットに仕舞った。

「署に戻ったら鑑識で指紋の検査をしてもらおう」時間を計算して配送所を出た。

瑛子は不安な気持ちでいっぱいになっていた。

朝、松岡が出かけた後、玄関の下駄箱の上で、宅急便の送り状が貼り付けられている茶色の

封筒を見つけた。手に取って確認をすると、送り状の宛先が刑事課長の真山の自宅宛になっ

ていた。封をしていないのが変に思ったが、中味を取り出すと、中にエアクッションに包ま

れたSDカードが入っていた。

「まさか！」

確認せずにいられなくなった。丁寧にエアクッションに付いているセロテープを剥がし、

SDカードを立ち上げたパソコンに挿入した。不安が的中した。SDカードは「証拠品」だった。

「課長にこれを送りつけてどうするのだろうか……？」

激しく動揺したが、慌ててSDカードを抜き取りパソコンの電源を切った。元のようにカードをエアクションに包んで封筒に仕舞い、封筒を元の位置に戻した。

洗面所で洗濯機が終了を告げていたが、何も手につかなくなった。しばらくダイニングテーブルに座りこんで考え事をしていた。

「何か変……」
しっくり来なかった……刑事の妻の勘……

「カードを渡すのなら、こんなまだるっこい事をしなくても署で直接手渡せばいいのに……」

本当にSDカードを課長に送るのだろうか？」

冷静になって推理を始めたが、その前に家事を片付けよう……主婦に戻った。

ベランダで洗濯物を干している時、シルバーのセダンがマンションの前に停まり松岡が降りて来た。慌ててに玄関に走って封筒の位置を確認した。

「さっきと同じ場所」
安心してリビングに戻った瞬間、玄関のドアが開いた。

「どうしたの？」

リビングルームのドアを開けて言った。

「……」

何も答えない松岡は茶色の封筒を持っていた。

「どうしたの？」

「これだ。忘れ物だよ」

そう言っ、これ見よがしに封筒を瑛子に見せた。

「気付かなくてごめんなさい」

「……」

それには答えず松岡は玄関から出て行った。

瑛子がベランダに出ると、車に乗り込む際にベランダを見上げた松岡と目が合った。

瑛子の背筋が凍った……松岡は口元に笑みを浮かべていた。

セダンは静かに発進した。

「気をつけて……」

運転席には何も知らない川島がいる……その川島に向かって瑛子は呟いた。

素手で封筒の中身を探った事を後悔した……罌に嵌められたかもしれない……刑事の妻

の勘……

「松岡はわざと封筒を忘れて行った……私が気付かない筈はないという事を知って。そして、やはりわざと封を開けておいた。私が中味を確認する事を

承知で。課長には送らない。

そして……後で指紋を調べるだろう」

妻の不貞を知りながら、何も言わず、しかし、真綿で首を絞めるような事をする松岡が

怖くなった。

瑛子は昔を思い出した……

会社の社長との不倫を告白した瑛子を、松岡は待っていてくれた……あの時、瑛子は松

岡を試した。

社長との関係は終わりに近づいていた。松岡に好意を持ち始めていたが、踏ん切りがつか

なかった。かなりしつこく迫っていたが、松岡の「静かな感情」が飛び込む事を躊躇わ

せていた。だから、思い切って告白をした。

「自分はおなただけを愛している」熱い気持ちを打ち明けてくれたが、激しく、嫉妬など

の感情をぶつけてくれた方が迷う気持ちを解消させてくれる、と感じた。

「待っています」という松岡の中に潜む「静かな感情」が怖い様な不安な気持ちになった。

その後、社長との関係は完全に終わりになったが、瑛子は悩んでいた。

親しい友人は「松岡さんは本当に瑛子の事を愛しているのよ。心が広い人だと思うわ。」

松岡さんと結婚すれば幸せになる。だから、迷う事なんてないじゃない」そう言った。

何も知らない両親からも散々言われた。

「いい加減にしないと、幸せが遠のいていくだけよ。松岡さんを逃がしたら次はない」

時間が経過し、松岡と会わない日々を過ごしていく間に、徐々に瑛子から不安感が薄れて行き「愛されている」という安心感が広がり始め、そして、松岡と結婚をする決心をした。

結婚生活は穏やかで平和で幸せだった。ただ、時々、松岡の「静かな感情」に影響されて自分も「静かな感情」を持ち始めている事に気が付いた時「これでいいのだろうか？」

という思いが起きた事もあった。

淡々と日々を過ごし、人生を終える……それが幸せなのかもしれないが、本当の自分は

違うのに、いつしか松岡のペースに巻き込まれてしまった……

その事を考えた時「なかなか

か踏ん切りがつかなかった自分の感情」を思い出し、選択は正しかったのか？ そう思う

事もあった。

「贅沢な悩みよ。子供がいないのは淋しいかもしれないけれど、瑛子を見てると松岡さん

に愛されてる。って感じるわよ。だって、幸せそうだし綺麗だ

もの」

やはり友人はそう言った。

「愛されているから幸せ」なのか？ 「愛しているから幸せ」
なのか？

答えを見つけれないでいる時に……川島と出会った。

「宅急便です」

松岡の実家から野菜が届いた。

宅急便の送り状を見て、さっきの事が蘇って来た。松岡は何
をどうしたいのだろう？

「知っているんだぞ」と分からせておいて、じっと悩み、苦し
む姿を見ていただけ

のか？ それとも昔の様に、いつか川島と別れる自分を待って
いたのか……？

第二話

6

(1)

「緊急指令。神奈川区松見町二丁目スカイハイツ麻生809号室で発砲事件発生……」

事件発生を告げる無線を、松岡と川島は車の中で聞いた。

「松見二丁目は目と鼻の先だな」

松岡はすぐに無線を取った。

「こちら松岡。現在現場付近。すぐに急行します」

連絡を終えた時には、現場であるスカイハイツを確認出来る場所に到着していた。

「相手は拳銃を所持しているぞ。応援が駆けつけるまで中には踏み込むな」

真山課長から指示を受けていた。

「行くぞ」

松岡は川島に声をかけ、車から飛び降りた。

11階建てのスカイハイツは、発砲事件が起きているという様子はなく静まりかえって

いた。恐らく、住民は恐怖に駆られながらも、部屋の中でじっと息を潜めているのだろう。

松岡と川島はマンションの南側に廻って8階を見上げた。コーナー出窓とベランダが交

互に続いているマンションの構造では、ベランダ越しに隣に逃げ込む事は出来ない。その

事を確認して、二人は北側のエントランスから中に入った。

管理人室の中では、館内巡回で8階のエレベーターを降りた時、809号室で発砲音を

聞き、肝を潰して110番通報をした顔色を失くした呆然自失状態の管理人がいた。

809号室の住人は長内雅也という若い男だった。管理人は発砲音を聞いただけで、室

内で何が起きたのか、何人いるのか、怪我人が出てるのか、何も分からない状況だった。

「ここから出ない様に」

室内の間取り図を確認した後、既に駆けつけている交番勤務の巡査に指示をし、管理人

にそう告げて、二人は8階に上がった。

エレベーターを降りて辺りを警戒した時、809号室のドアがかすかに開く気配を感じ

た二人はエレベーターホールの壁に身を隠した。ドアを少しだけ開けて顔を出し外の様子

を探っている男を確認出来た。男はすぐにドアを閉めた。

松岡は川島に「行け」と手で合図をした。

「ここで見張っていた方がいいんじゃないですか？ 中の状況が全く分からないんですよ」

「いいから行け！」

「ベランダからは逃げられないし、応援が来るまで待つべきで

す」

「相手はすぐに部屋を出るつもりだぞ。だから、ドアから顔を覗かせたんだ」

「マズイですよ」

「部屋から出たらどういう結果になるか分からん。部屋の中で決着をつけるんだ。俺が責任を取る。いいから行け！」

「松岡さん！」

松岡の考えている事が理解出来なかった川島は、声を荒げ松岡を制したが、松岡は既に

809号室に向かっていた。川島も覚悟を決めて後に続いた。

ドアの前で拳銃を手にして中の気配を伺った。

中でガタゴトと何かを荒らしている様な音が聞こえた。「管理人」や「宅急便の配達人」

になりすまして、チャイムを鳴らせる様な相手ではない。

「行くぞ」と言う様に松岡が目で合図をし、ドアノブに手をかけた。鍵がかかっていない

ドアのノブが回った。

ドアに鍵がかかっていない事で、また言い様のない不安な気持ちが始まった。

自分より遥かに経験を積んでいる松岡が、今まで謝った判断をした事は記憶には無いし、

今の様な状況下で、上司の命令を無視した事もない。しかし、

今回だけは違う。経験が無

い自分の判断の方が正しい……それは間違いない。

「ダメです」目で訴えたが、松岡は無視をした。

「警察だ！」

銃を構えて室内に突入した。中にいた誰かが一瞬驚いた様な
気配が伝わった空気から感
じられた。

素早く室内を確認すると、ベランダに続くリビングルームの
隣の出窓がある洋室のドア
が開いていた。室内にいるのは驚いた男……長内雅也……一人
だった。

長内は覚せい剤を打った直後の様で、トロンとした様な目を
二人に向けたが、その目が
すぐに狂気と怒りに変わった。反射的に長内はテーブルの上の
ナイフを手を取った。長内
の動作で、また、川島の中に不安な気持ちが沸いた……「不安」
などという様な簡単で単

純なものではなかった……明らかに「間違いだった」という「
後悔」と「恐怖」……その

「恐怖」は長内に抱いたものではなく、松岡に対して抱いた感
覚だった。

テーブルの上には覚せい剤と使用済みの注射器、拳銃があっ
たが、松岡と川島は、拳銃
を向けたままの姿勢を取りながら長内の動作に神経を集中した。

長内は、菊名界限に縄張りを張る「菊隆会」の準構成員であ
るが、組長と盃を交わす組

員として認められて欲しい、と思っていた。

「菊隆会」も勢力を伸ばすには一人でも多くの組員が必要だが、喧嘩が強ければ誰でもいいという訳ではない。組への忠誠心や仁義、頭の良さ、冷静な判断、実行力、ヤクザ気質

での男の観念、自分より強いものに媚びへつらう生き方なども要求される。

そこで、「菊隆会」では、目の上のたんこぶである、敵対する「旭星会」の日向義行という、最近頭角を現してきた若頭の殺害を長内に命じた。

「菊隆会」も「旭星会」も、共に不動産業と、コンサルティング業を看板に掲げ「インテリやくざ」とうそぶいているが、蓋を開ければ、みかじめ料などを要求する典型的な暴力

団である。最近では、組同士の小さな抗争がひんばんに起き、刑事第二課組織犯罪対策係でも目を光らせていた。

長内にとって、指令は命を賭けた就職試験だったが「菊隆会」では、成功しても失敗し

ても「準構成員が勝手にやった事」として逃げる事も出来る、と計算していた。

重大な指名を帯びていた長内は、異常な程の精神の高ぶりと不安感を押さえる為に覚醒

剤を打った。しかし、拳銃を手にした長内は緊張の余りか、マシンの自室で誤射して

しまった。その時点で、長内は就職試験に落ちた様なものだった。下手したら、不合格よ

り悪い事になる可能性もある。焦った長内が興奮状態で「殺るしかない」と準備をしていた

る所に、いきなり警官が飛び込んで来た。

「冗談じゃない！ 俺の邪魔をする奴は容赦しない！」

頭にあるのは、目の前の警官を始末して、一刻も早く日向を殺害する事だった。

「バカヤロー！」

突然長内が叫び、松岡に体当たりをして来た。

咄嗟の出来事だった。あれだけ長内に神経を集中していたのに、それも間に合わない程、

長内の行動は素早かった。

松岡が呻いて前かがみに倒れこみ、拳銃が手を離れた。

長内はナイフを抜いて、仁王立ちになった。

「撃て！」

松岡が叫んだ。

「このヤロー！」

長内も叫んだが、ナイフを手にしたまま動こうとはしなかった。
た。

川島は急所を外した位置を狙って拳銃を構えた。

「狙え！ 急所を狙うんだ！ 撃て！」

川島は躊躇った。拘束目的の発砲で、撃ち殺すのが目的ではない。

「仕留めろ！」

松岡が苦し紛れに叫んだ時、長内がナイフを振りかざして川島に向かって来た……川島の拳銃が火を噴いた。

弾は長内の心臓を撃ち抜いていた。

「松岡さん！」

銃を撃った衝撃で後ろに倒れそうになる身体を立て直し、川島が声をかけた時に、松岡は一度離れた自分の拳銃を手を取っていた。

「松岡さん、大丈夫……」

川島は最後まで言えなかった。拳銃を手にした松岡の目がかに取り付かれた様な異様な目をしていた。

……撃たれる……川島は感じた……瑛子の顔が浮かんた……覚悟をして目を閉じた……

銃声が響いた……しかし、身体に何も感じなかった。

目を開けると松岡が倒れていた。

「松岡さん！」

思わず松岡を抱き起こした。

「瑛子と……幸せになれよ……」
そう言って松岡は目を閉じた。

「……！」

初めて人を撃った事と、松岡の最後の言葉がショックだった。

……松岡さんは、知っていたのか……

……気がついた時……応援部隊が飛び込んで来た。

(2)

「松岡警部補の勇氣ある行動に対し、敬意を表わすと共に警部補の死を悼みます。」

直立不動で立っている真山刑事課長と川島の前で、県警本部警務部監査室長の渋谷洋一

郎が、松岡の死を悼む言葉を述べた。

「では、川島巡查長、報告をしてください」
渋谷の表情が変わった。

「自分は、松岡警部補と聞き込みを終えて署に戻る車の中で緊急無線を受けました」

今まで何度も同じ事を言ってきた。

「松岡警部補と自分が上の命令を無視して強行突入した事が、

今回、松岡警部補が殉職し

た一番の原因だという事は重々承知しております。自分の直の上司とは言え、間違った判

断を下す事に、最後まで抵抗出来なかった自分の力の至らなさを痛感しております」

……それは事実だった……

「命令を無視して突入した理由を述べてください」

「はい。自分達が8階に到着し様子を伺った時、部屋のドアが少し開いて長内が顔を出し

ました。松岡警部補は、長内は直ぐに出かけるつもりでいる。

部屋から出たら、マンショ

ンの住民に危険が及ぶ可能性もある。部屋の中で決着をつける必要がある。そう考えてお

りました」

「川島巡查長も同様に考えていましたか？」

「自分は、応援を待つべき。だと考え、松岡警部補に訴えました」

「続けてください」

「はい。銃を構えて強行突入したのは、一度発砲している事もあり、ドアチャイムを鳴ら

して、という事が通じない相手だと判断したからであります。ドアには鍵がかかっていま

せんでしたので、松岡警部補と自分は部屋に突入しました」

川島は言葉を切り、唾を飲み込んだ。飲み込んだ唾が石の様に固く、重く感じられた。

「入った瞬間、長内は驚いた様子で立ち上がりました。自分は、管理人から見せてもらっ

た部屋の間取り図を思い浮かべながら、咄嗟に室内の様子を見渡して、室内には長内しか

いないという事を確認しました。松岡警部補と自分は長内の動作に集中していましたが、

長内の動作は素早く、テーブルの上に置いてあったナイフを手に取り、突然、松岡警部補に襲いかかりました」

……ここからが川島の勝負だった……

「松岡警部補の腹を刺したナイフを長内が抜いた時、松岡警部補は倒れそうになりました

が、体制を立て直し、長内に狙いを定めていました。長内が怯んだ様子を見せたので、自

分は『こっちは二人だ。大人しくしろ』などと長内を説得しました。松岡警部補は、その

長内に向かって銃を発射する素振りを見せましたが、引鉄はひけませんでした。力が出な

かったからです。自分は長内の急所を外す位置に拳銃を構えていました。松岡警部補はそ

んな自分に急所を狙って仕留めろ、そう言いました。その瞬間、長内が松岡警部補の拳銃

を奪い、至近距離で松岡警部補の胸を撃ちました」

「松岡警部補は拳銃を奪われた時、どういう状態でしたか？」

「はい。長内は松岡警部補を刺した時と同じ様に素早い行動だった事、拳銃を握る松岡警

部補の手の力が弱かった事もあり、簡単に拳銃を奪われました。恐らく、松岡警部補は何

が起きたのか分からない状態だったと、自分は考えています」

「川島巡查長はそれでも、発砲は出来なかったのですね」

「はい。自分は発砲する事は出来ませんでした。自分の判断が遅かった事で、松岡警部補

が命を落とした。と考えています。松岡警部補に対しては申し訳ない、という気持ちでい

っぱいで、自分はいかなる処分も受ける覚悟しております」

川島の脇の下から気持ちの悪い汗が幾筋も伝った。

「松岡警部補は倒れこみながらも最後の力を振り絞って自分に言いました。仕留めろ。お

前が……自分の事ですが、殺られたら犠牲者が増える。自分達は警察官だ、市民を守れ、

無駄死にはするな。だから、自分は急所を狙って撃ちました。事実、あとほんの僅か、数

秒ですが撃つのが遅かったら、自分も撃たれていました」

「真山課長。鑑識の検証はどうだったのですか？」

渋谷はいかにもキャリアを絵に描いた様なタイプで、鋭い目の奥には揺ぎ無い自信が宿っていた。

「はい。横浜中央署鑑識課及び県警本部の協力を頂きまして、
嚴重に且つ慎重に検証を行

いました結果、撃った位置から判断した傷の具合、弾道その他、
全て川島巡査長の証言通

りで相違ない、という結論に達しました」

「川島巡査長、あなたは拳銃を撃ったのは始めてでしたか？」

「いえ、自分が交番勤務時、暴走族同士の集団暴行事件の際に
威嚇射撃をした事はありません
す」

「人を撃ったのは初めてですね」

「はい。初めてであります」

「分かりました。川島巡査長に関する処置については後日通告
をいたします。川島巡査長
においては、今回の事案に縛られる事無く、業務を遂行すべく
日々精進してください」

……この事案に縛られる事無く……そんな事は自分には出来
ない。それは、そうさせな

い様に松岡が導いた……松岡はこういう事は想定していなかつ
ただろう。それなのに……

あれは、自分に対する制裁なのか……

「刑事」という職業に、事件を解決するという信念以外、出世
とか、手柄とか、組織への

忠誠心、そういう事が含まれているとしたら、松岡は決して「良い刑事」ではなかった。

自分もバカにしてる部分もあった。しかし、りっぱで優秀な「捜査員」だった。警察を題

材にした本を読んだ事もある。その本を読んだ時、あくまでもフィクションの世界だった

が、自分が松岡に抱いていた「立派な捜査員」という気持ちは間違っていない、と感じた。

その「立派な捜査員」が最後の最後に「捜査員」ではなく「ただの男」になった。自分

を「捜査員の部下」としては見ず「妻が情を通じる相手」としか見なかった事が悔しかった。

た。もし、自殺という事が分かったら、被疑者死亡で不起訴処分になるだろうが、松岡は

銃刀法違反の罪を犯している。松岡にその罪を背負わせる事よりも、自分が背負う十字架

の方が重い様な気がした。

だから……偽装工作をした……

目で見て、頭で様々な事を考えた。

特に二人の手の硝煙反応には注意を払った。長内は一度拳銃を撃っているが、松岡は一度

も発砲しない事になっている……消えるかどうか分からないが、硝煙反応を隠すために松

岡の手を傷から溢れ出ている血で染めた。その行為の最中、人間を、尊敬していた先輩刑

事である松岡を冒瀆している気持ちになった……

（大丈夫だ）……全てが終わった時「ぼんやり」していると思っていた自分が、僅かの時間

の間にいろいろな事を考え行動出来た事に対して、何か得たいの知れない魂が自分の中に

宿った様な気がした……宿った……のだろうか……それとも……

数日後処分が下された。

川島は警察官職務執行法7条により正当防衛が認められ、殉職した松岡は二階級特進で警視に昇格した。

7

(1)

「吉田、松っちゃんのデスクを整理してやってくれ」

真山は、チラッと川島を見て、吉田に言った。

「すみません……」

川島は課長に向かって頭を下げた。

「いいんだよ。今日はもうこれで終わりだ。川島、お前もたまには早くあがれよ」

課長は優しい眼差しを川島に向けた。

「すみません。お言葉に甘えて、今日は帰らせて頂きます」

川島は課長に礼を言い、自分に代わって松岡のデスクを整理してくれる吉田にも頭を下げた。

「借りは返せよな」

吉田はそう言ったが、後輩である川島を見る目は温かった。

「お先に失礼します」

川島の後に次いで、吉田以外の一係の捜査員も部屋を出て行った。強行犯係のブースに

残ったのは、課長の真山と吉田だけになった。

「川島は大丈夫か？」

真山は、生意気だが、どこか人をホッとさせる雰囲気を持ち合わせている川島を思い浮かべながら吉田に訊ねた。

「あいつも思いつめるタイプだからな。みんなでフォローしてやってくれよ」

「正当防衛が認められお咎めなしになったから、少しは元気になりましたが、結構参ってますね」

「あいつも思いつめるタイプだからな。みんなでフォローしてやってくれよ」

川島は殻に閉じこもり、すっかり「川島らしさ」を失くしていた。

「分かりました」

吉田はそう言って、松岡のデスクの整理を始めた。

「これ？ 何でしょうか？」

上から順番に引き出しを整理していた吉田は、一番下の大きな引き出しの手前に裸で置

いてあったSDカードを取り出した。

「何だ？　それは？」

「SDカードですよ」

「SDカードって何だ？」

「携帯やデジカメ、パソコンのデータを保存するメモリーです。
昔のフロッピーデスクと

同じ様な物ですよ」

「ふーん。で、中に何が入ってるんだ？」

「見てもいいですかね？」

「構わないよ。見てみようよ」

「松岡さんのプライベートな物って事ないですよ？　Hな画像
像とか？」

吉田はパソコンを立ち上げた。

「SDカードはそういう物を保存するカードなのか？」

「そうじゃないですけど、そうだとしたら、松岡さん、嫌な
気分だろうなって」

「そんな物は署のデスクにはしまっておかないだろう。捜査関
係じゃないか？」

パソコンが立ち上がって、吉田はカードを差し込んだ。手際

良く、パソコンを操る吉田を、

真山は関心した様に見ていた。SDカードを開くと、日付の入ったフォルダが沢山保存されていた。吉田は一番上のフォルダを開いた。

「課長！ これは……」

吉田が絶句した。

「何だ……！ 松ちゃんの奥さんだ……一緒にいるのは川島か！」

画像を確認した真山も言葉を失った。

吉田は次から次へとフォルダを開いて、保存されてある画像を開いた。真山は画面を食い入る様に見つめている。

「不倫の現場写真……ですか？」

言わなくても画像がそれを物語っていた。

「日付はいつからになってるんだ？」

「今年の4月18日が初めて、最後は10月17日です……」

「10月17日……？ だけど、何でこんな物を松ちゃんが持ってるんだ……」

「さあ……？ 自分で撮ったとか……撮影場所は川島のマンションですよ。川島という表札も映っています」

「川島と松っちゃんの奥さんが出来ていた、っていう事なのか？
松っちゃんが気付いて奥

さんを尾行して、この写真を撮ったって言うのか？ だけど、
ひと回り位年が上だろうよ」

真山は、松岡瑛子の顔を思い浮かべた。

何度か会った事はある。スラッとした美人で松岡には相応しくないし、勿体ない。会う度

にそう思っていた。外見的には「不釣り合いな二人」であっても、
美しい妻は、刑事の夫を信

頼し、尊敬し、愛している……真山はそう感じていた。

「俺はお前にたった一つだけ負けている事がある。それは、カ
ミサンだよ」

飲んだ席で、自分の妻と比べて真山がそう言うのと、松岡は何
も言わずただ笑っていた。

あの時の松岡は本当に幸せそうだった。

「ちょっと待てよ」

真山はそう言って、デスクの受話器を取り上げ「川島短縮」
ボタンを押した。

「お客様がおかけになった電話番号は現在電源が入っておりま
せん……」

アナウンスが流れた。

「川島のヤロー……」

悪態について、次に「松岡自宅短縮」ボタンを押した。

「只今、留守にしております……」

「松ちゃんの家も留守だ」

「二人でデートでもしてるんじゃないですか？」

吉田が呆れた様子で言った。

「おい！　そういう言い方をするなよ！」

「すみません……」

「マイッタなあ……」

真山は頭を掻きむしった。

「川島の奴、署じゃこんな顔を見せないのに……やけに男っぽ
い雰囲気っていうのか……」

「うーん……」

真山は改めて画像を確認して唸った。

「惚れてるんですね」

「吉田、お前、そんな刺激的な事言うなよ」

「だけど、いい顔してるじゃないですか？」

「確かにな……」

瑛子を見つめる川島の何とも言えない幸せそうな顔と、松岡
の幸せそうな顔が重なり、真

山は眩暈を起こしそうになった。

「課長……大丈夫ですか？」

吉田が心配そうに声をかけた。

「あー、大丈夫だ」

「でも、なんか安心しましたよ。川島ってこういう奴だったって」

「川島は誰よりも人間臭い男だよ。もう、いいよ、そういう事は。現実に戻ろうよ」

「現実……ですか？」

「川島は、松っちゃんが気付いていたという事を知っていたのだろうか？」

「いやー、それはないと思いますよ。あの二人の間には何かあった、という様な雰囲気は感じませんでしたよ」

「そうだなあ……っていう事は、松っちゃんは自分の胸だけにしまっていたって事か……」

「半年以上もですか？」

「吉田、お前だったらどうする？」

「自分？……ですか？ 自分のところは手のかかるガキが三人もいるし、それに松岡さんの」

奥さんみたいに綺麗じゃないし……」

「だからさ、その事は外して」

「うーん……耐えられないでしょうね。一人だけの胸にしまっておく事なんて出来ないですよ。

嫉妬だって沸くだろうし。相手が自分の相棒だしたら尚更ですよ」

「そうだよな。俺だってそうだ。だが、松っちゃんは耐えていた……って事か？」

「松岡さん、S^{エス}じゃなかったんですか？」

「S^{エス}?」

「サドです」

「変な事言うなよ!」

「性的な意味じゃないですよ。一般的にサドって、相手を加虐し服従させることによって自

分の欲求を満たす事です、自分自身を追い詰める事で満足すると言うか。自分に対してサ

ドだったという事です」

「だけど、それをしてどうなるんだ？」

「だから、それで満足しているんですよ。だとしたら、多分、奥さんも何も気付いていない

と思いますよ。自分だけが知っているんだぞ。という事に快感……って言っちゃ失礼かもし

れませんが……それでいい、そう思っていたのかもしれない」

「松っちゃんはそんな変態か？」

「変態じゃないですよ。性格的な事ですよ」

「俺はそんな生き方嫌だなあ……夫婦だし、相棒だぞ。どっちも自分の生活の基盤だ」

「自分だって嫌ですよ。白黒の決着はつけたいですよ」

「……だよな。だが、松っちゃんはそれをしなかったのかなあ……」

「だから、サドだって……本当に失礼な言い方かもしれないけれど」

「そんな簡単な事じゃないんだよ……」

「すみません。だけど、簡単な事じゃないって……課長……まさか！」

真山は答えず、椅子を回転させて吉田に背を向けた。

……俺が知っている松っちゃんらしくない事をして……何かあったのか？

心の中で、松岡に問いかけた。

「吉田、この事は誰にも言うな」

椅子を回転させて吉田に向かって言った。

「分かっていますが、課長が考えている事を言ってくださいよ」

「お前と同じ事を考えてる」

「いいんですか？　言っちゃって」

「あー、言ってみろ」

「松岡さんを撃ったのは川島かもしれない……って事です」

「……」

「ズルイですよ。課長も答えてください」

「それもある……」

もう一つ考えていた事もある……それは、簡単に口には出来なかった……

真山は鍵を使って自分のデスクの引き出しを開け、松岡が撃たれた件での川島の事情聴取のファイルを取り出した。

「あれっ？　課長、それって……」

松岡殉職の際の川島の事情聴取などを含めたファイルは、全て資料室に保管されていた。

「コピーを取っておいたんだ」

そう言って真山はファイルを開いた。

「俺は……疑問を持っていたんだよ。あの時、松っちゃんは『応援が来るまで待ってろ』と

いう俺の指示を無視して、川島と二人で拳銃を構えて長内の部屋に突入した。その事が俺は

一番気に食わないんだ。今までも松ちゃんは上司の指示を無視した事はある。今までは正し

かった……だが、今回の事は大きなミスだ。勘が頼りのあの松っちゃんのする事じゃない。

あの時は何を考えていたのか……」

「川島と奥さんの事が根底にあって、正常な精神状態ではなくなっていた。という事ですか？」

「うーん……そんな事は有り得ない……俺はそう思いたい。いか、話を戻すぞ。覚醒剤を

打った直後で、興奮気味の長内は半狂乱になって、まず、松っちゃんの腹を刺した。お前が

川島だったかどうか？」

「長内を落ち着かせる様に、説得します」

「川島もお前と同じ事をした。だが、相手は錯乱状態で発砲を
していて、ナイフで松っちゃんを刺した。説得が通じるか？」

「……」

「俺だったら、長内を撃つ。こっちは二人だ。だが、勿論急所は外す」

「川島は躊躇したと言っていました」

「松っちゃんは、川島にはそういう教育をしていない筈だ。躊躇している間に松っちゃんは撃たれた」

「川島は長内を撃つ気がなかったって事ですか？ 怖気づいたとか」

「それも一つ考えられる。他に二つある。一つは……長内が松っちゃんを刺し、川島が長内を撃って、その後、松っちゃんを撃った。もう一つは……長内が松っちゃんを刺した事までは同じだ。川島は長内を撃つ。その後が問題だ……松っちゃんが自分の拳銃で自分の胸を撃った……」

「課長！ 待ってくださいよ！ 川島が松岡さんを撃った、という可能性は自分も考えました。ですが……」

「カードに残された写真を見て思ったんだよ。松っちゃんらしくない事をしている。何か覚悟をしていたんじゃないか？ と」

「覚悟……って言ったって。あの事件は突発的に起きた事です
よ」

「あの時、二人は聞き込みの帰り道に現場付近に居合わせたんだよな」

「そうです。コンビニの売上金強盗の一件の帰りでした」

「そうだったな……」

「だけど……そうか！ 川島は、松岡さんを殉職扱いにしたい……と考えたという事ですか？」

「その可能性の方が大きい。川島は何も知らなかったんだ。もし、知っていたとしても、川島は自分の不倫がバレたからと言って、相手の旦那を殺す様な奴じゃない。それは俺が保障する」

「だけど……自殺は銃刀法違反で書類送検で……」

「被疑者死亡で不起訴処分だ」

「懲戒解雇になるって事ですか？」

「うーん……だが、退職金はパーだろうな」

「川島は、松岡さんの奥さんの事を考えて……ですか……」

「いや、川島はそういう事を計算する男でもない」

「じゃあ、一体何なのですか？」

「分らん」

「この事はお前と俺だけの話だ。絶対に口外はするな！ 万が一、今俺達が話した事が当たってたとしたら、とんでもない事になる。その事は分かっているだろうな」

「分かっています」

「川島をフォローしてやれよ、と言ったが、あいつの様子にも気をつけてくれないか？ 川島は生意気なところもあるが、根はナイーブだ。松っちゃんは川島を可愛がっていた」

「了解です」

「最後に聞くが、そのカードはどういう状態で置かれていたんだ？」

「この引き出しの一番手前に、裸で置かれていましたよ」
吉田はサイド引き出しの一番下の大きな引き出しを指さした。

「SDカードはどうしますか」
パソコンから外したカードを吉田は、真山に見せた。

「これはなかった事にする」

「課長……」

吉田はカードを真山に渡した。

「デスクの整理は終わったか？」

「一応終わりました。私物は……あのSDカード位で」

「遅くまで悪かったな。松っちゃんの穴埋めに上はいろいろ考えているが、当分の間は一名

欠員のままだ。塚原じゃ松ちゃんの代理は務まらない。お前も大変だろうが、その辺を考え
てみんなの面倒を見てやってくれ」

班長であった松岡のすぐ下には、51歳になる、松岡同様叩き上げの塚原保がいた。

真面目で誠実な性格で、真山も信頼を置いていたが、松岡の様には、人を引っ張っていく力がなかった。

「分かりました。自分はこれで帰りますが……課長はまだ帰らないのですか？」

「うん、正直言って、このまま真っ直ぐ家には帰りたくない気分だ。ちょっと一人で考えた
い」

「じゃあ、お先に失礼します」

「有難う。今日の事はくれぐれもよろしく頼む」

「承知しています」

そう言って吉田は帰って行った。

(2)

「松ちゃんよ、どうしちゃったんだよ」

吉田が去って、一人になった真山はデスクに頬杖をついた。
急に涙が溢れた。

松岡とは20年程の付き合いになる。初めて会ったのは、神奈川県内の警察署の剣道大会
だった。

初戦で対戦する松岡を見た時「なんだこの男は？」と思った。
若いんだか、若くないんだ
か、年寄りなんだか、年寄りではないのか、冴えない男で「勝
てるな」真山はそう思った。

制限時間五分の三本勝負。先に二本取れば勝ち。決着がつか
ない場合は、一本取って勝ち。

の勝負だったが、甘く見ていた真山は自信を失いそうになった。
審判の「始め」の合図と同

時に、冴えない松岡が豹変した。「勝ちに行くぞ」という気持
ちが全面に現れていて、手強

い相手だった。しかし、一本気過ぎる試合運びは、また真山の
中に自信を取り戻してくれた。

それでも、決着はつかず、延長戦の一本勝負で真山は勝利を手
にする事が出来た。

勝負がついて防具を脱いだ時、松岡が真山を見て、ニコツと
笑った。その笑顔が妙に人懐

こくて「今度、一杯やりませんか？」真山は松岡を誘った。真
山が二回戦敗退の後、約束が

果たされた。松岡は、一目惚れした台湾人と日本人との混血の女性と結婚したばかり、と嬉

しそうに話をしていたが、少し接しただけで「刑事としては優秀な男だ」と分かった。

5年前、真山が横浜中央署刑事課長に就任して、松岡は部下になった。それから、ずっと

松岡を信頼し、頼りにしていた。

「松岡と川島か……」

おもむろに真山は受話器を取り上げ、川島に電話を掛けた。今度は呼び出し音が鳴っていた。

「川島です」

緊張した声で応えた。

「真山だ。松っちゃんのデスクの整理は終わったよ」

「すみません。自分がすれば良かったのですが」

「いいんだよ。お前も辛いんだ。どうだ、調子は戻ったか？」

真山は言いながら、電話の奥の気配を嗅ぎ取った。

「はい、少しは。でも、まだ時間がかかるかもしれません」

川島の声には覇気がなかった。

「もう、マンションか？」

「そうです」

真山は耳を澄ませた。
受話器から、キッチンの流しからだろうか？ 水の音が聞こえた。

「休んでいるところに悪かったな。今日はゆっくり休んで、また明日から頼むぞ」

「はい、分かりました」

真山はフックに手を掛け川島との電話を切ったが、次に松岡の自宅に電話を掛けた。やはり、留守電のままだった。

「川島と一緒にいるのか。水の音は、松岡の奥さんが流しで洗っているものでもあるのだろうか」

瑛子の顔を思い浮かべながら、そんな事を考えた。

「松っちゃんも、こうして、気配を探ったりしていたのだろうか？ 不倫の現場を押さえて、

写真を盗撮する時はどんな気持ちだったのだろうか？」

考えると切なくなった……待てよ……それにしちゃ、執拗に写真を撮っている……

真山は慣れない手つきで、吉田のデスクのノートパソコンを立ち上げ、さっき、吉田が行なっ

ていた操作を思い出し、SDカードを差し込んでもう一度写真を確認した。

「やっぱり異常だ……」

フォルダの日付はほぼ毎週になっている。コンビを組んでいる川島の休みは、松岡が一番分

かっている。過去の勤務表を見れば分かるだろうが、川島の休みの度に、松岡は妻を尾行して

いた事になる。それに、何故、SDカードを自分のデスクにしまったのか？ 誰かがデスクの

引き出しを開ける事だってある。だから、誰かに見られてしまう可能性もあった。それを承知

で、引き出しに入れておくという事は……しかも、通常はファイルなどを入れるためにある、

一番下の大きな引き出しに剥き出しで……

「誰かに見て欲しかったのか？ 刑事の不倫か……相手は先輩の妻……表沙汰になったら、警

務部観察課の調査対象になり、懲罰の対象になる可能性もある。それを狙っていたのか？

……それは嫉妬なのか……？」

(2)

「一人で大丈夫なのか……？」

川島は瑛子をずっと心配していた。

あの日から一ヶ月が経った……ずっと考えていた……自分の行為は正しかったのか？ あの

まま「自殺」として扱われた場合、どうなっていたのだろうか？

「何故松岡警部補は自殺をしなくてはならなかったのか？……

暴かれたら……暴かれなかった

としても、一番辛い思いをするのは瑛子だ。真実を封印した事で瑛子の気持ちを救う事が出来た

のか？……瑛子と自分はこれからどうなるのだろうか？ このま

ま会えずに、そして、時が経ち

『思い出』だけになってしまふのか？」

川島は携帯を手にして瑛子の携帯に電話をかけた。

「来る？」

「いいの？」

「うん……」

そして、今、瑛子と向き合っていた。

川島は俯いたままの瑛子をじっと見つめていた。

いつもなら……ドアを閉めたと同時に瑛子は川島の胸に飛び込み、お互いの温もりを感じあう

……「会いたかったの」「会いたかったよ」言葉には出さずに。

今日は……遠慮がちに手を差し伸べた川島の脇をスッと瑛子は通り抜けた……まだ、一度も

二人は言葉を交わしていなかった……

「知っているのよ……」

突然、瑛子が言った。

「知っている……？ っ。何を？」

「あなたから無邪気な笑顔が消えた訳……今日は一度も笑顔を見せない……」

「瑛子が俺を拒否している……だから……」

「……」

また瑛子は俯いた。

「違うの……」

「何が違う？」

瑛子は答えずに「知っているのよ……」と同じ言葉を繰り返した。

「だから、何を知っているって言うんだよ！」

「ほら、キレた。前はそうじゃなかったでしょう？」

「ふざけるな！」

川島は瑛子が目の前にいるのに、理由の分からない事に対してイライラしていた。

「無邪気なあなたの笑顔が好きなのよ……」

「いい加減にしろよ！ 何が言いたいんだよ！」

「松岡の事よ……」

「松岡さんの事？」

「間違っているのよ。そう思わない？」

「思わない！」

川島は怒鳴った。

「私が何も知らないと思っているのだったら、それも間違いよ」

「知った事を言うな！」

川島の目の中に怒りが宿った。

「あの日……主人が死ぬ前日。主人と話をしたのよ」

「松岡さんと話？」

川島は瑛子の顔を覗き込んだ。悲しげで辛そうな瑛子の表情を見た川島の目の中の怒りが少し消えた。

「松岡は全て知っていたのよ。私達の事。毎週私の後を尾行して……あの人のデジカメの中に私とあなたとの証拠写真が一杯入っていた。私はそれを見つけていたの……」

「……！」

「覚えている？ 松岡が忘れ物を取りに帰った時の事。あれは課長宛の宅急便だったのよ。中

身は証拠写真が詰まっているSDカード。私が見る事を想定してわざと置き忘れた。だってね、

封がしてなかったの。でも、実際は送らなかった。ただ私に見

せるためだけ。多分、指紋を調

べたと思うのよ。そして、私はあなたにその事を伝える。そう思っていたのよ。でも、私は言

わなかったし、態度を変えなかった。何も知らないから、あなたも変わらない。その事で我慢

が出来なくなって、私に全て話をしたのよ。動かない証拠があるからどうしようもない事だけ

ど、私は肯定もしなければ否定もしなかった。じっと黙って松岡の話を聞いていただけ」

川島は黙ってじっと瑛子の話を聞いていた。

「松岡は、あなたや私の事を責めなかった。それに『私と別れる』とか『あなたと別れる』と

かそういう事は一切言わなかったし、私に『どうしたい?』とも聞かなかった。でも、言った

の。『自分で決着をつける』と。それが……私が聞いた……松岡の……最後の言葉よ」

そこまで言った瑛子の目から大粒の涙が溢れた。

川島は瑛子の涙を初めて見た。葬儀の時の瑛子を思い出した。あの時、気丈に振る舞っている

瑛子は涙を見せなかった。

「ずっと一人で耐えていたのか?」

川島は瑛子の傍に行って肩を優しく抱いた。

堪えきれなくなった瑛子は、川島の胸に飛び込んで泣いた。

「ごめん……ごめん……」

川島はそう言って瑛子の髪を撫ぜ、泣くがままにさせておいた。

「松岡が撃たれた……と、聞いた時……思ったの。自分で撃つたのではないかって……決着をつけたのではないかって……」

瑛子は顔を上げて川島を見た。

「……」

川島の目からも涙が溢れていた。

「殉職と聞いて、松岡さんはりっぱでした。そう聞いて、二階級特進を知った時……あなたが

そうさせてくれた……そう思ったの。松岡の名誉と、私のこれからの事を考えてくれて……」

「違う！ 自分のため……だ……」

「自分のため？」

「……」

川島は答えなかった。

「どういう事？」

「……」

まだ黙っていた。

再び、沈黙の時間が流れた……

「自分のため……に何かをしたの？」

涙がいっぱい溜まった目で、川島を見た。川島の目からも涙が溢れた。その涙を瑛子は指で拭った。

「松岡さんは自分で自分の胸を撃った。最後に言ったんだ……瑛子と幸せになれ……と」

「……！」

「俺は嫌だった。最後は刑事のままでいて欲しかった。でも、松岡さんは……瑛子の夫で死んだんだ。それが嫌だったから、だから……偽装工作をしたんだ……自分のために」

「私は……」

「俺は正直に話をしたんだ。だから、もう何も言うなよ！」

「言わせて！」

「いい加減にしろ！」

「私はずっと……主人のために生きてきた、と思っているの。……それが自分の生きる道、自分を守るにはそれしかないと思っていたから。じゃあ、幸せじゃなかったのか？ 愛していなかったのか？ と聞かれたら……幸せだったし、愛していた。と答える。でも『刑事』という

主人の仕事、主人の人生を守るために、自分の感情を殺して生

きて来た部分があったの。だか

ら……あなたが……もし、私のために……だったら、生きていて良かった、ってそう思うの」

「違う!」

瑛子は川島の口を手でふさいだ。

「違うない!」

「うるさい!」

川島は乱暴に瑛子の手を振り払った。

俯いている瑛子を川島は見つめた。川島の視線を感じた瑛子が顔を上げ、二人は黙ったまま

見つめ合った。このまま永遠に言葉を交わす事がなくなる……静かだが重い時間が流れた。

「あなたと出会って幸せだったの」

瑛子が口を開いた。

「幸せだった?……どうして過去形なんだ?」

「もう無理かもしれないから……」

「……」

「でも……あなたを失いたくない。ずっとあなたと一緒にいたい
いの」

「ずっとそばにいるよ」

「もう無理なのよ」

「無理なんかじゃない！ もう言うな！」

川島の声は悲鳴に近かった。

「無理……なの。あなたの無邪気な笑顔を見る事は出来ない……
……あなただって分かっているで

しょう？ 松岡のした事が。いつもの松岡の……静かな感情……
……静かな嫉妬……」

「俺はそんなに弱くない……」

「あなたは……」

「言うな！」

川島は瑛子の両腕を掴んだ。

何かを訴えたい様な瑛子の目を見つめる川島の眼差しが、フ
ツと優しくなった。

「もういいんだよ……あの時、俺は自分の気持ちのためだけに
偽装工作をした。でも、気付いた

んだ。松岡さんの最期に言った言葉の意味に。最愛の妻と部下
との関係を知って、最期にあんな

神の様な事を言える筈はない……人間はそんなに優しくなれる
筈はないんだ。聞いた俺がどんな

気持ちになるか分かっていたんだ」

「松岡の復讐……」

「復讐? ……確かにそうだったのかもしれない。そう感じていたから、だから、また人間が嫌い

になった……たった今まではそうだった……」

「……?」

「瑛子と俺の間には『松岡さんの死』という、大きな犠牲が存在する……そうだろう?」

川島の口調が変わった。

「犠牲? ……」

「そうだよ。でも、さっき、言っただろう?」

「……?」

「俺が……もし『瑛子のため』にだったら、生きていて良かった……って。そう言ったよね?

今までは『自分のため』だけ、そう思っていた。でも、さっきの瑛子の言葉を聞いて『自分のためだけではない』という事が、どんなに俺にとって大事な事かという事に気付いたんだよ。それを教えてくれたのは松岡さんなんだ」

「松岡が教えてくれた……?」

「松岡さんは復讐のつもりでいたかもしれない。優しい人間もいれば、優しくない人間もいる。

それを見極めて、真の優しさを感じ取るのも人間なんだ。大切

なのは……俺と瑛子がどう思うか、
どう感じるか、なんだ」

「分らない……」

「松岡さんは瑛子を本当に愛していたんだよ」

「……」

「あの時……松岡さんは俺に長内の急所を狙え、仕留めろ。そう言った。それを聞いた長内がどういう行動を起こすか？ その事に気付かない松岡さんじゃない。全て承知していたし、咄嗟に自分でシナリオを描いていた。俺に瑛子を託す事を含めて、全て……だけど、最期の最期に松岡さんは俺に言いたかったんだ。『俺は瑛子の夫だ。お前に負けない位、それ以上に瑛子を愛している』と。刑事というプライドを捨ててまでも、それを貫きたかったんだ」

「……」

「川島、考えてみる、松岡さんはずっと俺に問いかけていたんだよ。そして、俺は考えて、自分

の気持ちで松岡さんの最期の言葉を受け止めた。自分のためには、瑛子のため……と。今は自分の

行為に悔いはないし、松岡さんの死を『犠牲』にしないで、飛び越える。俺も自分の気持ちを

貫く」

「飛び越える事が出来るの？」

「飛び越えなくちゃいけないんだ。今、本当に幸せなんだよ。今だけじゃない。これから、もっ

と幸せになるんだ。俺の言いたい事はそれだけだよ。俺が言った事を瑛子がどう受けとめるか

……覚悟しているよ……」

川島は少年の様な無邪気な笑顔を浮かべていた。

8

「川島、今晚付き合ってくれ」

真山は川島に声をかけた。吉田がチラッと二人の様子を見た。

「はあ……」

パソコンのキーボードを打つ手を止めて、川島は答えた。

「そんな情けない声出すなよ。刑事課の連中はみんな俺に誘われるのを待ってんだぞ。その俺が

お前を誘ってるんだ。嬉しそうにしろよ」

「はい……」

川島の声には生氣がなかった。

真山は冗談が通じなかったか？ と気恥ずかしい気分になり頭を掻きながら自分のデスクに戻

った。そんな真山を、また吉田がチラッと見た。

「おい、いつになったら元のお前に戻るんだよ」

生ビールのジョッキを持ち上げて、乾杯の仕草をした真山が川島に言った。

「えっ、いつもの自分ですけど」

「そうか……まあ、いいけどさ。いつものお前だって、お前が言うのだったら。ところで、最近、

実家に帰ってるか？」

「実家……ですか？ 帰ってないけど。何なんですか？ 急に」

「小さな親切大きなお世話だよな。年取ると大きな世話ばかりやきたくってな。嫌がられつい

でに単刀直入に聞くが、松っちゃんと何かあったのか？」

「松岡さんと……って、どういう事ですか？」

マイペースな川島に引きずりこまれそうになった真山は姿勢を正した。

「松っちゃんの話をして辛い事を思い出させて申し訳ないが。俺は、お前と松っちゃんはベスト

コンビだと思っていたからな。もう一度聞くぞ。本当に何もなかったのか？」

「自分は何もないって思っていましたよ。だけど、松岡さんが、

自分に対してどう思っていたの

かは分かりません。もしかしたら、自分はボーっとしているから、イライラしていたかもしれないし」

「一緒に行動していて、妙な事を言われたり、お前に対して変な行動を取ったりした事はないのか？」

「そうですね……どっちもないですよ。って、自分が鈍感だから気がつかなかったのかもしれないけれど……」

「おい、いい加減、この席で『自分』なんて言うのはやめてくれないか。飲んでるんだ。気楽にしろよ」

「はあ……」

「こんな物が松っちゃんのデスクから見つかったんだよ」
真山はSDカードを川島に見せた。

「SDカードじゃないですか」
瑛子が言っていた証拠が詰ってるSDカードと分かったが、とぼけた。

「そうだよ。中に何が入っているか知っているだろう？」

「捜査関係の資料ですか？」

「とぼけるなよ」

「松岡さんとかあったって聞く事は、このカードに自分……僕の悪口が書かれている物でも入っているんですか？」

「悪口より性質が悪い物だ」

「エーッ！ そんなの分らないですよ。だけど、本当にデスクの引き出しに入っていたのですか？」

「そうだ。しかも剥き出しでな。吉田がデスクの整理をしている時に見つけた」

「……」

「しつこく聞くぞ。松ちゃんから何か話をされていなかったのか？
トラブルとかはなかったのか？」

「トラブルって……特に何も」

「松っちゃんの奥さんと付き合っているのか？」

「……」

川島は答えなかった。

「このカードの中には、お前と松っちゃんの奥さんとのツーショット写真が沢山入っているんだ」

「……」

やはり川島は答えなかった。二人は黙ってビールを飲んだ。

「お前のプライベートな事だ。言いたくなかったら言わなくていい。ただ、俺は気に食わないんだ」

そう言って真山はビールを飲み干した。

「生ビール二つ」

真山は追加オーダーをした。

二人の間で沈黙が流れた。酒の席での沈黙は辛かった……

「鍵が掛かっていないデスクなんて誰が開けるか分からない」
真山は沈黙を破って言ったが、ビールが運ばれて来て話すのを一旦止めた。

「それに、誰かに見つけれられる可能性もある。捜査関係資料だ
って思われてな。実際に、吉田が
見つけた。何で、こんな物を無防備にデスクにしまっておいた
のか？ 松っちゃんの事が分から
なくてそれが気に食わないんだ。だから、お前に聞けば分かる
かもしれない。そう思ったんだ」

また話を始めた

川島は思いつめた様な表情でビールを飲んでいる。

「気を悪くするなよ。あの時の事を聞く。お前の言った事にウソはないのか？」

「ウソ？」

「そうだ。松っちゃんは自分で自分を撃ったのではないのか？」

「違います！」

川島は真山を見据えて言った。

「どうして松岡さんが自分を撃つ必要があるんですか？ そんな事を言う課長の方が変です」

「そうだと思うよ。そんな事を考えるのは松っちゃんに対して
も申し訳ないと思うし、何よりお
前を疑って失礼な話だ」

「僕はどうでもいいですけど、松岡さんに失礼ですよ」

「悪いな、謝るよ。だけど……」

「松岡さんは勇敢でりっぱでした。ただ、僕の判断が遅かった
から、僕が躊躇ったから、松岡さ
んが命を落とした。あれは僕の責任です」

「俺はお前を責めているんじゃない。それは分かってくれよ。
そうじゃなくて、松っちゃんに何
か意図があったんじゃないか？ そう考えているんだ」

「意図？」

「そう得意図だ」

「有り得ません。あの時、現場の近くを通ったのは偶然でした……あーっ、松岡さんから、捜査に偶然はない。偶然があったら疑え。そう教えられてきました。でも、あの時は疑いようのない偶然です」

「そうだろう。長内と松っちゃんには接点が全くない。だからあれはお前の言う様に疑いようのない偶然だ。だが、俺の指示を無視して突入した事は偶然じゃない。その時点で松っちゃんには何か意図があった。俺はそう考えているんだ。死人に口無しだし、死んだ松っちゃんの事を悪くは言いたくない。犠牲になったのは松っちゃんだ。でも、お前が犠牲になる可能性だってあったんだ」

そう言って真山は川島を見たが、川島は表情一つ変えなかった。

「SDカードを見た時、松っちゃんの異常さを感じたんだ。毎週のように奥さんを尾行して写真を撮っている。それに、お前のマンションの部屋の前にも立っていた。『川島』という表札をも撮っている」

「……」

「刑事として捜査の中で、松っちゃんは執拗な位の執念を燃やしていたが、刑事ではなく、一人の男として見た時の松っちゃんはこんな事をする様な男ではな

い。俺はそう信じていた。でも、
実際にやっている。だから、信じられなくなってきたんだ」

「僕には分かりません……」

「他人事の様な事を言うなよ」

「……」

「お前と、松ちゃんと、松ちゃんの奥さんとの事なんだ。俺だ
って、こんな話はしたくない」

「……」

「川島……」

「課長の指示を無視した事はあるまじき行為だと認めます。だ
けど、松岡さんの判断は間違っ

ていなかったのかもしれないと思います。覚醒剤を打った後の状
態で、長内を取り逃がしていたら、

もっと大変な事になっていた可能性があります」

「それは可能性だ。まもなく応援も駆けつける、それを待つ方
が賢明って事は松っちゃんが一番

良く分かってる。だけど、飛び込んだ……」

「ちょっと待ってください。あの時の事はもう正しい判断がく
だされています。それが真実です」

「それは分かっているよ。蒸し返すのは良くないって事も」

「じゃあ、蒸し返すのはやめましょうよ」

「ただ……あれからのお前を見て、お前が心配なんだよ。松っちゃんはお前を殺す気なんじゃないかって」

「課長……」

「お前を殺すって言ったって、命を奪うんじゃない。お前の魂を奪うんだ。お前は鈍感な男じゃない。松っちゃんはいつも言っていた。川島はぼんやりした風を装っているけれど、芯は負けず嫌いで神経が細やかだ。川島とコンビを組ませてもらった事に感謝しています、と。松っちゃんはお前が可愛くて仕方がなかったんだ」

（魂を奪う……）

「俺は、松っちゃんとは同じ年だし、長い付き合いでいろんな話をしてきた。俺が松っちゃんの上司になった時、聞いた事があるんだ。『俺が上司でやりたくないか?』と。その時、松っちゃんと言ったよ。『やりにくい?』とは、俺に嫉妬の感情がある事を言っているのか?』言いにくい事をズバリ言われて面食らったけど『そうだ』と俺は答えた。そうしたら、松っちゃんはまた言った。『嫉妬は自分を見失う原因になる。若い時に、関わったある事件で、嫉妬の感情のため、に苦い経験をした事がある。だから、その時から、自分の中

から嫉妬の気持ちを排除する事に

した。だから、嫉妬なんてないし、やりにくい、とも思わない』
それを聞いた時、松っちゃんら

しい……と思ったよ。俺は自分が考えていた事が恥ずかしくな
った」

「……」

「いつだったかな？ 今年の夏前かな？ 松っちゃんと飲んだ
時『川島が俺を飛び越えそうな気が

がする』とポツリと言ったんだよ。悔しそう顔をしている松っ
ちゃんを見て、俺は『嫉妬か？』

と言いそうになった。でも、言わなかった。自分の中に閉じ込
めていた感情が出て来て、戸惑っ

ているんだな。そう感じたよ。SDカードを見た時、松っちゃ
んは、静かに嫉妬の気持ちを抱き

ながら生きていたのか……って、思ったんだよ」

……瑛子も言っていた……静かな感情、静かな嫉妬……

「話は逸れたが、長い間封じ込めていた嫉妬の感情が沸いた松
っちゃんが、とんでもない事をす

るんじゃないか？ って、俺は心配なんだよ。お前は大事な部
下だ。部下だけど家族みたいに思

っている。お前だけじゃない課員のみんなにも同じ気持ちでい
る。俺の大事な家族が、魂を奪わ

れるなんて事は俺には耐えられない。だから、お前の胸の中に
つかえている物があったら、俺の

前で吐き出して欲しいんだよ」

……松岡さんが自分の魂を奪う……そんな事はさせない。自分はどう受けとめるか……自分は瑛子と一緒に生きていく……

「僕の胸の中につかえている事は、松岡さんを助けられなかった、という無念な気持ちだけです。

松岡さんはりっぱな刑事だし、りっぱな人間です。それはいつも一緒にいた僕が分かっています。

去年の末に松岡さんの自宅に呼ばれた事がありました。その時、松岡さんは早くに酔いつぶれて

申し訳ない。そう謝ったのですが、その時言いました。僕が来てくれた事が嬉しいから酔いつぶ

れた、と。僕は昔気質の松岡さんの捜査方法が納得いかない事があって、時にはバカにして生意

気な事を言った事がありますが、それでも松岡さんは可愛がってくれていました。だから、課長

もそういう松岡さんを信じてあげてください」

「川島……」

真山は川島の顔を見た。川島も真山に顔を向け、ニコツと笑った。

「川島、お前は……」

真山は声を詰らせた。

剣道大会で初めて見た「松岡の笑顔」と今の「川島の笑顔」が同じだった。

「僕は松岡さんの奥さんと結婚します」

「……！」

真山は驚きで声が出なかった。

「まだ、プロポーズはしていません。あー、でも……すぐには結婚できないか……」

川島がまた少年の様な無邪気な笑顔を見せた。

「もし、彼女がプロポーズを受けてくれたら、僕は刑事を辞めます。突然に申し訳ないと思います

す。迷惑をかけるけれど許してください。でも、僕は今、課長が仰ってくれた言葉、僕が『大事

な部下で家族だ』その言葉は一生忘れません。その言葉を聞いて『刑事になって良かった』って、今、心の底からそう思いました。

の下で働けて良かった』って、今、心の底からそう思いました。ありがとうございます」

そう言って川島は突然立ち上がった。

「今日のご馳走になりました。ビール美味かったです」

川島は真山に頭を下げた。

「おい、川島！」

突然の出来事に真山は面食らった。

「おやすみなさい」

川島はまた無邪気な笑顔を見せたが、それが泣き顔に変わってしまう時、踵を返して逃げ

る様に居酒屋を出て行った。

「川島さんから銃の返還がないのですが」
警務課の進藤が刑事課に現れた。

今朝、京浜急行神奈川新町駅近くのファミリーレストランで、銃を持った男が暴れているとい

う通報が入り、刑事第一課強行犯係の係員は拳銃所持の許可を得て、現場に急行した。男が持つ

ていたのはモデルガンだったが、レストラン内に立てこもった。しかし、昼過ぎには観念した男

が自ら投降して来て、無事に事件は解決していた。

「おい！ 川島は何処に行った」

真山が残っている係員に声をかけた。

「あいつ、調べたい事があるからそれを済ませて戻るって言っていましたよ」

「何の件でだ？」

「課長の許可も取ってあるって。そう言っていましたけど……」

「そんなの許可していないぞ！ お前ら、何やってるんだよ！

川島の行動には気をつけろ！

と言ったはずだろう」

真山が舌打ちをしながら怒鳴った。

「携帯に電話しろ！」

言われる前に、吉田が電話をかけていた。

「電源が切られてます」

「川島のヤロー！ 何やってんだ！ 念のため、松ちゃんの自宅にもかけてみる！」

「松岡さんの家も出ません！」

「探せ！ マンションだ！ 川島のマンションに行け！ 松ちゃんの自宅にも行ってみろ！」

真山が最後まで言い終わらないうちに、吉田と小笠原が部屋を飛び出していた。

去年末、居酒屋で川島の本心を言葉で聞く事は出来なかった。しかし、あの笑顔と、立ち去る

時に垣間見せた泣き顔で、真山は「川島の心」をハッキリと見る事が出来た。その川島が警察官

としてあるまじき行動を執った。

「魂を奪う……川島、俺が心配していたのは……こういう事だったんだよ。バカな事をするなよ

……」

その頃、川島は、みなとみらいのホテルの一室に瑛子と一緒にベッドの中にいた。

「2301号室よ」

ホテルにチェックインした瑛子から部屋番号の連絡があったのは、神奈川新町のファミリーレストラン立てこもりの犯人が確保された直後だった。

「直ぐに行くから待っていて」

川島は瑛子に答えた。しかし、直ぐには行けない状況だった。これから刑事として処理しなく

てはならない事がたくさんある。でも、今日は瑛子との大事な日だった。一年前の今日、瑛子と

初詣に行った。そして、思い出の日に、瑛子にプロポーズする日でもあった。そのために、ホテルのスイートルームを予約し、最上階のフレンチレストランにディナーの予約も入れておいた。

胸の内ポケットを触った。内ポケットには大事な物が入っていた。

やるべき事を考えた……署でやる事。それは、自分じゃなくても、自分が居なくても処理出来る

……自分しか出来ない事、自分が行かなくてはならない場所……それは瑛子が待っている場所

……自分を本当に必要としている人……それは瑛子だった。

迷わず瑛子が待っているホテルに向かった。

「結婚しよう」

「今、なんて言ったの？」

川島の隣に横になって、ベッドに頬杖をつきながら瑛子は訊いた。

「もう言えないよ。一度しか言えないんだ」

「だって、好きって言われた事もないし、愛してるって言われた事もないのに？」

「言って欲しかった？」

「ううん……」

「返事は？」

人を嫌いになる葉があればいい……と思った事がある。川島に自分は相応しくない。今まで

「若くなりたい」そう思った事はなかった……でも、今思う。

「何が望み？」と訊ねられたら

「若くなりたい。彼に相応しい人になりたい」そう答えるだろう。

「……」

瑛子は答える事が出来なかった。

「何を気にしているか、って分かっているよ。だけど俺は決め

たんだよ。瑛子と一緒に生きて
いくんだ。もう刑事も辞める。瑛子だけを守って生きていく…
…」

瑛子は川島の胸に顔をうずめた。川島の胸に温かいものが流れ落ちた。

「幸せ？」

瑛子の涙に気付いた川島が訊いた。

「幸せ……」

「もう……いいんだよね？」

「……」

黙って頷く瑛子を川島はきつく抱きしめた。

「だけどね、もう少し待ってくれる？ 自分の中で考えている時期があるんだ」

……ぼんやりした自分じゃなくなっている、と本当に自信が持てた時……

「大丈夫よ」

瑛子は笑って、川島の鼻をつまんだ。

……署に戻らずに、ここに来て良かった……心の底から、その幸せを感じた。

「猫を飼うんだよ」

「猫？」

「覚えてる？ 一年前の今日、初詣に行く電車の中で猫を見た事。猫が『楽しんで来いよ』

って言ったって、そう言っただろう？ その時から、もし瑛子と一緒になれたら猫を飼いたいって、夢見ていたんだ……」

「覚えているわ。猫が好きなの？」

「うん、猫は媚びない。だから、子供の時から好きだった……」

「猫と私とどっちが好き？」

「決まってるだろう……」

「猫でしょ」

「バカ！」

川島は瑛子とまた一つになった。

……「愛してる」……と言いたかったが、言葉に出来なかった……その言葉を無限に使って
も……この思いは伝えきれない……

「指輪を買いに行こう！」

川島が瑛子の手を引いて、二人はベッドから離れた。

「でも、その前にこれにサインして」

「何？」

「婚姻届だよ。瑛子の気が変わらないうちに」

「せっかちなのね。気が変わるなんて事ないのに……」

「いいから、サインして」

すでに「川島達也」のサインがある婚姻届を瑛子に渡した。

「証人は誰にするの？」

サインを済ませた瑛子が訊いた。

「一人は真山課長。課長は俺の事を家族、そう言ってくれた。もう一人は別れたおふくろ。こ

れを見たらおふくろはもうため息をつかなくなる」

瑛子から受取った婚姻届を大事そうに白い封筒にしまった。

「おふくろに郵送するんだ」

「お母さんには直接渡せばいいのに」

「まだ会えないんだよ。正式な夫婦になったら、二人で会いに行く。その頃には、俺は、ぼん

やりした俺じゃなくなっている」

「ぼんやり……って、お母さんは、あなたがぼんやりした子なんて思っていないわよ」

「ぼんやりしてるんだよ」

そうなんだよ……川島は瑛子に言わなくてはならない事があった。

「指輪を買いに行く前に、署に寄って拳銃を返してくる」
何気なさを装って言った……敢えて「何気なさを装う」自分を感じて、不安になった……

「拳銃を持って来ちゃったの？」
案の定、瑛子が不安そうな表情を見せた。

「うん、署に戻らずにホテルに直行した」

「だって、それって、職務上に違反している事じゃないの？」
瑛子は嫌な予感がした。

「そんな難しい事言うなよ。ちゃんと正当な理由は言ったよ。
ウソついたけど」

「ウソはダメよ」

「だって、瑛子がどっかに行っちゃう様な気がして」
不安な気持ちを瑛子に気付かれない様に、わざと子供っぽい事を言った。

「ほらっ、子供みたいな事言ってる。これじゃあ、やっぱり、
まだお母さんには会えないわね」

「だよね……」

「私は何処にも行かない。あなたが来るまでずっと待ってたのにおバカさんの川島達也ね」

「多分……ずっと、瑛子の前ではおバカさんだと思うよ。それでもいい？」

「覚悟してる……」

ホテルを出て、横浜駅までの道……川島は瑛子の肩を抱いた。すれ違う人が自分達を批判的に見ている様に感じた瑛子は、自分の肩を抱く川島の手から逃れようとした。

「気にする事はないよ」

川島は瑛子の肩を抱いたまま真っ直ぐ前を見つめていた。

（違うの……私が気にしているのは、その事じゃないの……）

瑛子は川島の横顔を見つめた。

（松岡の静かな嫉妬は消えていない……まだ残っている……）

「どうしたの？」

川島の優しい眼差しが、瑛子を更に不安にさせた。

沢山の批判的な目が一つの大きな塊になって、自分と川島を睨みつけている様に感じて、瑛子

は川島が肩を抱く腕を解き、川島の腕にしがみついた。

「何処にも行かないでね」

「何を心配してるの？ バカだな。ずっと瑛子の傍にいるよ」

横浜駅前の郵便局で母親宛の手紙を投函して、二人は駅に続く地下道を降りて行き、地下構

内に入って行った。

「どこかでお茶でもして待っていてくれる？ 署に拳銃を返してすぐに戻って来るよ」

「分かったわ」

「タクシーで行く事にするよ。その方が早いしね」

瑛子はタクシー乗り場が続く階段の下で川島を見送った。階段を昇りきる一歩手前で川島は振り返った。

「行ってらっしゃい」

そう言って、瑛子が笑顔で手を振っていた。

(2)

階段を昇りきって、タクシー乗り場に向かっている時、背の高い猫背の男とすれ違った。

何故か、注意信号が発せられたような気がして、川島は立ち止まり振り返ってその男を目で追

った。タクシー乗り場には二組の客が並んでいた。川島はその

まま列の後ろに並んだ。順番が

回って来て、タクシーの自動ドアが開いた時、また……感じた。

「乗らないんですか？」

タクシーの運転手が助手席の方に身を乗り出して訊いたが、

川島は答えず、背の高い猫背の

男が歩いて行った方向をもう一度振り返った。

「ちょっと、どうするんですか？」

川島の後ろでタクシー待ちをしていたサラリーマン風の若い

男が、イライラした様子で川島

の背中を突いた。

その瞬間、川島の中で激しく警報が鳴った。身につけている

拳銃を触った……自分は、とん

でもない間違いを犯した！……その事に気付いた。

「刑事」として「責任ある人間」として間違った行動をとって

しまった！……魂を奪う……そ

ういう事だったのだ！……

「松岡さんを飛び越えなくてはいけない！」その思いで、咄嗟

に背の高い猫背の男が歩いて行

った方向に歩き出した。急いで走りたいが、足がもつれて上手

く進まない……気持ちばかりが

急いていた。昇ってきた階段を降りて、駅のコンコースを確認

すると背の高い猫背の男がゆっ

くりとした様子で歩いているのが確認された。男の向かう先に

は小さな花屋があった。その花

屋の店先で白いコート姿の客が花を選んでいた。

刑事の勘……川島の注意信号が更に激しく鳴り出した……辺りを見回した。

「キャアーツ！」

一歩踏み出そうかと迷っていた時、女の激しい声が駅構内に響き渡った。

声がした方向を向くと、サアーツとその部分が空白になった。

空白の部分以外では、起きた事を知らない人間が「スタバでお茶しようか」などと、いつもの

の賑わう駅の様子そのものだった。

その空気が一変したのは「警察だ！」と叫んだ川島の一声だった。

「皆殺しだ！」

男の怒号が聞こえた。

「ワアーツ！」

また、何処かで叫び声が聞こえた。

花屋の前で、白いコートの胸元を真っ赤な血で染めた女が仰向けに倒れていた……花を選ん

でいた客だった……気付かなかった……

一瞬、シーンと静かになったが「自分は安全圏内」と悟った群集が、一斉に逃げ惑った。

駅の構内は大騒ぎになった。

「空白」と感じた場所には、足を押さえて痛がっている男子高

校生、腰を抜かして尻餅をついている年配の男、ナイフを持っている背の高い猫背の男、そして、白いコートの胸元を血で染め倒れている女……がいた。

「警察だつてよ。お早いご登場じゃん、オッサン立てよ」

猫背の男が、尻餅をついている年配の男を無理矢理起こして、後ろから羽交い絞めにし、男の胸にナイフを当てた。

「何やってるんだ!」

川島は怒鳴った。

「見れば分かるじゃん」

猫背の男は薄気味悪い笑いを浮かべた。

(瑛子……何処にいるんだ……) 川島は猫背の男に拳銃を向けながら、目で周りを探した。

猫背の男の後ろで倒れている白いコートが、また真っ赤な血で染まり出した。

「瑛子!」……やっと気付いた……薄いピンクのジュリアンが、鉢からこぼれていた。思わず

駆け寄りそうになったが、川島は自分の立場を考えた……自分……刑事だ!

「ナイフを寄越せ! その人を放せ! 撃つぞ!」

川島がまた怒鳴った。

「面白いじゃん。撃ってみろよ。その前に、このオッサンの喉をかき切るぞ!」

男も怒鳴った。

長内の部屋に突入した時の事が蘇った。撃とうと思えば撃てたが、男を撃つ事に躊躇いが生じた。

「どうしたんだよ？ どうせ撃てねえんだろう。チッ！」

「いいから寄越せ」

川島が静かに言った。

「それより、その拳銃をこっちに寄越しなよ」

「助けてください……」

「やだよー。オッサン教えてあげようか、俺さー、助けてくださいなんて言われると、余計に虐めたくなっちゃうのよ」

猫背の男は、年配の男の顔にナイフを当てた。

「お、お願いだから……助け……」

「おやー？ 今なんて言った？」

猫背の男の目が異様に光った。

「ワァーッ！」

突然、年配の男性の顔を切った。

「拳銃寄越せよ。そしたらこのオッサンをこれ以上傷つけない。助けてやるよ」

「お願いします……」

人質の男が、痛みを堪えながら恐怖の表情で言った。

「もうお前は逃げられないんだ。もうこれ以上罪を重ねるな！
放せ！」

銃を構えた川島と、猫背の男の睨み合いの時間が続いた。

「うっせえーっ！ 罪なんて関係ねーよ！ 人間なんてみんな
いっぱい罪を抱えてるんだ。こ

のオッサンだってそうだけ。このオッサンさ、さっき階段の下
から女子高生のスカートの中を

覗いていたぜ。あんただってそうだろう？ 偉そうに『刑事』
なんて言ってるけど、誰一人ま

ったような人間なんていやしねーよ。だから、俺が裁いてやる！
沈黙を破って、猫背の男が喚いた。

「お前の言う通りだ。みんないっぱい罪を背負って生きている。
だけど、一生懸命生きて、そ

して、罪を一つずつ消していくんだよ。だから、落ち着けよ……
」

「あんたは本当に刑事か？ 似非牧師じゃねえーの。そうゆう
綺麗事ばかり言っている人間っ

てたくさん知ってるんだよ。そういう事を言う人間に限って、
悪い事をしているって事もさ。

俺はそういう人間にいっぱい傷つけられてきたんだ！」

「だけど、その人とは関係ないだろう？」

「うぜーよ！」

「お……お願いします……助けて……助けてください……」

「ホラッ！ よっ！ 刑事さん、オッサンが助けてくれ！ つ
てすがってるぜ。拳銃を寄越せ
よ」

そう言っつて猫背の男は、また人質の男の頬を切った。

「刑事さん……お願いします……家族がいるんです」

「笑わせるぜ！ 家族だってよ。スカートの中を覗いているス
ケベ親父なんて、家族の方で願
い下げだ。いらねえーってさ」

猫背の男は、ナイフを喉元に当てた。

「もし、私に万が一の事があつたら……家族に伝えてください
……幸せになれよ……と」

ナイフを当てられながらも人質の男は、涙ながらに訴えた。

「幸せになれよ」……松岡さん……

川島の胸にその言葉が刺さった……

猫背の男の狂気じみた目をじつと川島は見た。

「撃たれる」と松岡に感じた時の恐怖感が襲ってきた。

川島は観念して拳銃を男の方に放り投げた。

「おーっ！　これが警察の拳銃か……痺れる……」

猫背の男は、人質を抱える手は緩めず、ナイフを捨てて川島の拳銃を手にとった。

「もう、これで満足だろう。人質を放せよ」

「アレッ？　そんな約束したっけ？」

「言っただろう。助けるって」

「あー、そういえば言っただな」

猫背の男はそう言いながら、銃口を川島に向けた。

「だったら放せよ！　お前は男だろう？　男は言った事は守るんだ！」

「あんた、バカじゃねーの。古いよ、そんな言葉。男が守るのは約束じゃない！　自分の事だけだよ」

「ふざけるな！」

突然、川島は猫背の男に向かって歩いた。

「ふざけるな、は俺が言う言葉さ」

猫背の男は薄ら笑いを浮かべていた。

「面白いぜ！　お前に興味が沸いた。オッサンにはもう用がねえー。あっちに行きな」

そう言って猫背の男は、人質にしていた中年の男を離れた。

「ワァーッ！」

自由になった中年の男は、叫び声を上げながら一目散で逃げ出したが、途中でよろめいて倒れた。

「キャァーッ！」

遠巻きに観ていた群集がまた声をあげた。

真山が、横浜駅東口駅構内で殺傷事件発生の報を聞いたのは、川島と瑛子の自宅の様子を見

に行った吉田と小笠原が署に戻って来たばかりの時だった。

「とんでもない事件が起きた」と思ったが、管轄外の事件……そう捉えていた。

現場では管轄の横浜西署の捜査員と機動隊員が遠巻きに様子を伺っていた。

「あれは横浜中央署の川島じゃないか！」

捜査の陣頭指揮を執っていた横浜西署の安藤警部が叫んだ。

「どうして川島がこんな所にいるんだ！ 横浜中央署に連絡を入れろ！」

安藤は怒鳴った。

「撃つ瞬間には呼吸を止め、銃がぶれないようにする……」
猫背の男は、ひとり言を言って、狙いを定めていた。

川島はジリジリと猫背の男との距離を縮めて行った。

緊張感が極限に達した時……「ワアーツ」と突然猫背の男が声をあげ、銃を撃った。

弾は川島のわき腹をかすった。焼け付くような痛みが走ったが川島は怯まなかった。腹から血を流したまま歩いた。

「何だよ！ お前は……来るなよ……！」
怯んだのは猫背の男の方だった。

「来るなよ！」

猫背の男は、川島に銃口を向けたまま後ずさりした。

川島はそのまま歩き出した。

「どけ！」

川島は猫背の男を睨みつけ、手で男を払う仕草をした。

「うっせえー！」

猫背の男は怒鳴ったが、銃を持つ手と足が震えていた。

その時、また銃声が響いた。

心臓のすぐ近くを撃ち抜かれた川島は、衝撃で仰け反ったが必死に体制を立て直した。

「どけ！」

川島のわき腹と胸元から真っ赤な血が溢れ出た。それでもま

だ気力で、猫背の男を思いつき

り突き飛ばした。川島に突き飛ばされた勢いで、猫背の男は尻餅をついた。手から拳銃が吹っ飛んだ。

その瞬間、警察が動いた。

「被疑者確保！」

怒鳴り声が飛び交い、構内は騒然となった。

「川島！」

安藤が川島に駆け寄ろうとした時……「来るな！」川島が怒鳴った。

「瑛子……」

川島は瑛子の前にひざまづいた。大粒の涙が溢れた。

「どうした？」

瑛子の頭を抱きかかえて訊いたが、瑛子は答えなかった。いぶし銀のフープピアスの片方が外れて、白いコートの胸元に刺さっていた。川島はそのピアスを瑛子の耳につけ様としたが、手が震えて上手くつけられなかった。途中で意識を失いそうになり、何度もピアスが手から離れた。

……一年前のちょうど今頃……鶴岡八幡宮に参拝した時の事が蘇った。

「何をお願いしたの？」

瑛子に訊かれて「秘密」と答えた。

……一緒に選んだフープピアスをつけた彼女とまたデートが出来ますように……そうお願いをした……

コートの上に落ちたピアスを手に取った。ピアスが血で染まったが今度は瑛子にピアスをつける事が出来た。

残っている最後の力を振り絞って、ズボンのポケットから手錠を取り出し、瑛子の腕と自分の腕に手錠をかけた。

「守れなくて……ごめんな……」
声を上げて泣きながら瑛子を抱きしめた。

誰も動けなかった……ただ、じっと川島を見ていた。

川島はもう苦しくなかった。瑛子と一緒に成れた事が嬉しかった。

「愛してるよ……」

瑛子に、初めて自分の気持ちを言葉に出して伝えた。

……瑛子の顔が微笑んだ……

川島は……瑛子が好きだった無邪気な笑顔を浮かべて……そのまま瑛子の上に重なった……

「川島巡查長の死亡が確認されました」

真山がその報告を聞いたのは、横浜駅東口に到着し車から降りた時だった。真山は、溢れか

えっている群集を掻き分けて夢中で現場に向かって走った。現場に到着した時、川島と瑛子が
並んで担架に乗せられていたが、二人の手は手錠で繋がれていた。

捜査員が川島のポケットを探って手錠の鍵を取り出した。

「待ってくれ！」

真山は制した。

「このままにしておいてくれないか。頼みます」

真山は捜査員に頭を下げた。

真山は一瞬目を瞑った。川島の顔を見るのが怖かった……

おい！　いくらぼんやりしているからと言ってこんな所で寝ているな！　……そう怒鳴りたかった……でも、見なくてはいけ

ない……勤めだ……覚悟をして目を開いた。

「何だよ、こいつ……何、笑ってるんだよ！」

それが……精一杯の……勤務中の……横浜中央署刑事第一課長としての真山秀作が言える言葉だった。

「課長、堂本志津子さんという方が見えています」

「堂本？」

「川島のお袋さんです」

廊下で下を向いて立っている川島の母親を見て、真山は驚きで声が出なかった。

松岡瑛子にそっくりだった……瑛子がもう少し年を取るとこういう雰囲気になるのだろう……

応接室で真山と二人きりになった時、志津子が頭を下げた。

「この度は、達也がご迷惑をおかけし申し訳ございませんでした」

「お悔やみを申し上げます。川島君は勇敢でしたよ」
真山も頭を下げた。

「達也が小学校一年生の時に離婚しておりますため、苗字が違っています。私もその後再婚をいたしましたし、達也は父親の元で父親の再婚相手に育てられました」

「全く知りませんでした」

「突然伺わせて頂きましたのは……これに、真山様のご署名を頂きたいと思ひまして……」

そう言って、志津子は机の上に用紙を置いた。

「拝見いたします」

真山は用紙を手を取った。

「これは……」

「婚姻届です。10日間程、仕事で地方に出ておりまして、郵便を確認出来たのは昨日でした。

達也から書留で郵送されて来た物です。中に手紙も添えられておりました。結婚の承認になっ

て欲しいと。一人は私で、もう一人は横浜中央署刑事第一課長の真山様だと。もう、提出する

事が出来なくなりましたが、私は達也の望みを叶えてあげたいし、気持ちを大事にしてあげた

いので、恐れ入りますがここにご署名をお願いいたします」

「喜んで署名させて頂きます。ちょっと待っていてください」

そう言って真山は内線電話を取り、課員に自分の印鑑と朱肉を届ける様に伝えた。

「それから、これは中に同封されていた達也からの手紙です。

私だけが分かっていればそれで

いい、と思いました。でも、親バカだと思いますが、達也の事を他の方にも分かって頂きたく

て。あの子は本当にやさしい子でした。あの子の気持ちを……読んで頂けますか？」

真山は志津子から手紙を受取って読み始めた。

「結婚するよ。まだプロポーズもしていないけれど……でも、母さんがこの手紙を読む頃に

は決まっているよ。自信はあるんだ。

彼女と一緒にいると『ここが自分の居場所』だと思える。

『ここしかない』って。

そして、彼女を知って……母さんにも手紙を書く気持ちになれた。素直に話も出来るし、

そしてお礼も言える。

彼女、母さんに似てるんだよ。だけど、俺はマザコンじゃない、残念だったね。

『マザコン』って言われた方が嬉しかっただろう？

母さんは母さんだし、彼女は彼女。

母さんは、俺が、母さんを嫌っている。そう思っていたんだよね。確かにそういう時期も

あった。避けていたのは、嫌っていて会いたくなかったからじゃない。一人前に成長した

俺を見せたかったから……そうなんだよ。

そろそろ、その時期が来るみたいだよ。待たせちゃって……ごめんね。

正式な夫婦になったら二人で会いに行くよ。その時をお楽しみに。

そしてお願い。結婚の証人になって欲しいんだ。もう一人は横浜中央署の真山刑事第一課

長。課長は、俺の事を『家族の様に思っている』そう言ってくれたんだ。家族が急に増えた。

寒くなってきたから風邪ひかないで、元気だね。

追伸

肝心な事を報告し忘れてるよね。やっぱり、まだ「ぼん

やりとした子」は治ってない。

彼女の名前は、松岡瑛子。俺の元先輩刑事の元奥さん。詳細は後日。

最後に……「幸せを感じる力」を育ててくれた母さんに……ありがとう！」

気が付くと、自分の前に印鑑と朱肉が用意されていた。真山は、課員が印鑑を届けに来た事

も分からない位に、川島が母に宛てた手紙の世界の中に入り込んでいた。

「ありがとうございました」

真山は丁寧に手紙を折り畳んで志津子に渡した。

「テレビや新聞を私は見ていませんが、世間でいろいろ達也の事を言われているのは分かって

います。でも、私はこの手紙の中の達也が本当の達也だと思っています」

「私もそう思います」

「私は……達也が生まれてからもずっと仕事を持っています、達也は私の母に育てられまし

た。仕事に夢中で満足に子育ても出来ていないくせに、私は達也に厳しい事ばかり要求してい

ました。どんなに淋しい思いをしたのか？ 私は当時、何も見えませんでした。愚かな母親で

す。でも、達也はそんな私にずっと優しくしてくれていました……」

真山は川島を思い浮かべた……川島には人を寄せ付けないところがあった。真山は「もっと

心を開いて欲しい」上司と部下の関係で、それだけではなく人間として川島と向き合った時、

その事を望んだ。また、川島はいつも周りの仲間の事に必要以上を気に配っていた。時にはそ

れが川島の「エエカッコしい」、そして川島が持つ「臆病さ」そう思っていた事もあった。

課の飲み会の席で「もっと自分の事だけを考えて行動していいんだよ。それにさ、選り好み

をしないで身を固めろよ」そう言って川島をからかった事もあった。その度に川島は「はあ……」

と答えて話をはぐらかし、惚けていたし「淋しい思いをさせたくないです」そんな事を言っ

ていた。でも、あれは「惚けていた」のではないし「エエカッコしい」をしていたのではない。

辛い思いをしている仲間を見ていた川島の優しさから出た言葉だった。

「一番淋しかったのは川島、お前じゃなかったのか？ その淋しさを埋める事が出来たのが松

ちゃんの奥さんだったのか……」

志津子の話を聞いた今、分かる気がした……遅かったのか？

……違うよな。遅くはないよな……

真山は心の中にいる川島に呼びかけた。

「お母さんだけじゃないですよ。私も他の課員も川島君の優しさを充分分かっています。それ

に、川島君は分かっていたのですよ。自分のために、お母さん

は頑張っているのだと。そうい

うお母さんの背中を見て成長していったのでしょう。川島君は
余り自分の感情を表す事なく、

淡々としている様に私の目には映っていましたが、心の中には
いつも人を思う、熱くて優しい

気持ちがありました。その川島君の魂は奪われずに私達の中に
残っていますよ」

「達也の魂……ですか？」

「そうです」

「あの……真山さんは、達也が愛した松岡瑛子さんをご存知で
すか？」

「はい。とても素敵な女性で、川島君が愛した理由がよく分か
りますよ」

「もう達也は、私に話してくれる事が出来なくなりました。恥
かしがり屋ですから、ホツとし

ていると思います。でも、今、達也が家族の様に思っている真
山さんにそう言って頂いて……

私も嬉しく思っていますし、そこまで人を愛した達也は幸せだ
った……」

志津子は声を詰らせた。

「川島君の最期の顔を見ました。いい顔をしていましたよ。彼
女を、川島君の奥さんの瑛子さ

んを本当に愛していたんでしょうね。あの顔を見て思ったので
す。人を愛する気持ちは大事だ、

と。こんな世の中です。人間を信じられないし、愛せなくなつてしまっていますが、それじゃ

ダメなんだ。人が人を信じて、愛して、一生懸命生きれば、いつか、きっと良い世の中になり

ます。その事を川島君は教えてくれました。私は警察官として……と言つても……その、余り

長くはありませんが、その事を信じて、職務を全うしていきたいし、これからの人生を歩んで

いきたい、と改めて感じました。お母さんは誇りを持ってください。川島君は……」

真山も、次の言葉が言えなかった。

「達也は本当に幸せ……だったのですね……」

そう言つて、志津子は顔を伏せたままハンカチで目頭を押さえていた。

「幸せだった……そうではなくて今も幸せなんです。そう思います。私は、川島君の笑顔を見

て羨ましく思った……嫉妬すら感じました」

……静かな嫉妬……でも、自分は松岡とは違う。川島の笑顔

……感じた「嫉妬」を生きる糧

にする……

真山は婚姻届を手に取り「川島達也」と書かれた文字をじつと見つめた。決して上手ではな

いが、誠実で優しくてシャイな川島の性格が、文字にはそのまま表れていた。一つだけ空白に

なっている欄に「真山秀作」と署名をしてしっかりと捺印した。

「お母さん、これをコピーさせて頂いていいですか？」

「コピー……ですか？」

「私も持っていたいんです」

「ありがとうございます。どうぞ、コピーなさってください」

「お借りします」

コピーをするために部屋を出た真山は、無人の廊下に何か気配を感じた……遠くに松岡が立っていた。

二人はしばらくの間向き合っていた。

「松っちゃん、もう許してやってくれよ……松っちゃんだって、川島の……あの最期の無邪気

な笑顔を見たら……許そうという気持ちになれるよ」

……遠くに立っている松岡がニコツと微笑んだ……

「松っちゃん……」

涙が溢れる目で遠くを見た時……松岡の姿はなかった……

— 終 —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3714q/>

サイレントジェラシー

2011年11月16日02時45分発行